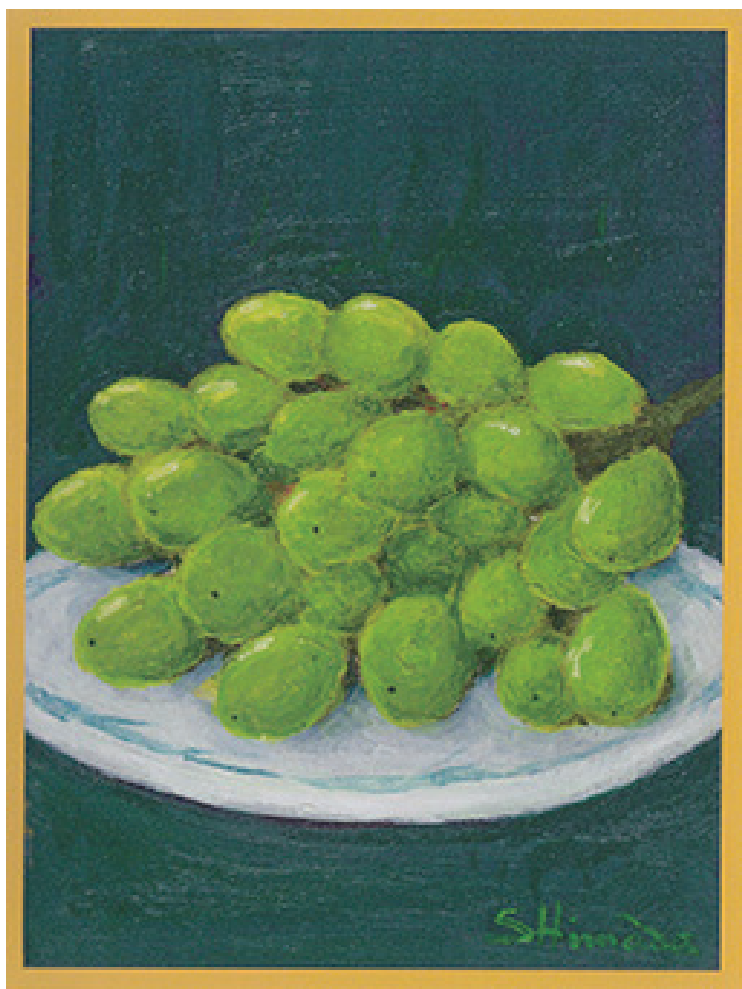


# 冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二六年七月一日発行（毎月一回一日発行）  
第六十五卷第七号（通卷七七三号）

7月号・2026年

応接室……新作五首

歩みゆく道

井口世津子



あわあわと三楹の咲く森深く逝きたる夫はい  
ずこに隠る

昨日より今日咲く花の数増えて足許近きから  
すのえんどう

山吹の盛り咲く道曳かれゆくトイブードルの  
目と目を合わせ

休みいるベンチの脇の陽だまりに昨日会いた  
る蝶がまた来る

鮮しき緑は空を狭めゆく歩みゆく道また戻  
る

〈雲珠 所屬〉

2026年7月 目次

〈応接室……新作五首〉……………井口世津子…

    冬雷集……………1

    作品一……………20

    七月集……………36

    作品二……………44

    作品三……………54

五月号冬雷集評……………桜井美保子…16

鮫島満歌集『虎耳草』を読む……………桜井美保子…17

タイトルを付けるのは難しい！……………高橋輝次…18

五月号作品一評……………小林芳枝・藤田夏見…34

五月集評……………鈴木やよい…40

五月号十首選（冬雷集・五月集）……………41

五月号作品二評……………井上菅子・江波戸愛子…42

五月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………52

富田眞紀恵氏追悼……………53

五月号作品三評……………山本三男・橘 美千代…57

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記④……………大山敏夫…66

歌集 / 歌書御礼……………編集室・佐藤靖子…68

# 冬雷集

妙義山と人曼茶羅（創展で馬場文衛先生に見ゆ） 大山 山 敏 夫 埼玉

頂に立ちて見放くことはせずただに仰げり峙つ山を

風雪に角の削がれしところなどどこにも見せずそそり立つ岩

岩裾を巻くもみぢ葉の盛り上がりふとぶと山稜線をなす

をとこの色濃い画ですねと呟けばとなりの翁ひとつ頷く

この岩のあたりに女人のかほありと示したまへど吾には見えず

腰掛けて話しつつ手を動かせば針金が人の様となりゆく

これは女これは男と続けざま作りテーブルに「人の曼陀羅」

手に取りてひかりにかざし映したる影は腕くむ帽子の男

馬場文衛先生は手に垂らしたる緑の針金をしまひ去りゆく

赤 間 洋 子 東京

朝日歌壇注目の女兒が時を経て新婚の歌に三個の\*が

「食べれない」「ら」抜き言葉が気に掛かり我はその都度心で正す

一日三度食事すること忘れぬが何を食べたか思ひ出せぬ日がある

老いるほど時の経過が早くなるそんな気がして一日終る

「もつと生きたい」死期近き夫呟きぬあれから二十三年我九十一歳

教へ子の最後のコーラス発表会同級生が数多集まる  
教員になりて最初の教へ子達の思ひ出話良きも悪しきも

兼 目 久 栃木

日本中何処にでも桜咲く桜惜しみつつ見て葉桜となる  
長男が高校のとき植ゑし芝三十年たちて緑こくなる  
震度「5」のゆれの始まりぬテレビを見つつ地震の継続  
雨音とカヘルの鳴く音が同時に聞こゆ今宵なつかし  
学生の時代のなつかし心構へを十分に聞きしはつきり物言ふ  
中国の歌と会話を聞きてよしなつかしきテープに魅了されたり  
校外の自然を利用しアイスホッケースキー場がありしに  
総数が35万と多かりき小・中・高別不登校事情

森 藤 ふ み 東京

ちらしには包丁研ぎますとあり我も以前研ぎに出したり  
研がれたる包丁の刃の輝きに切れ味試すと大根を切る  
力入れず何でも切れる包丁を使ひて料理のはかどりて行く  
夜遅き食事すませてキッチンに子が明日の弁当の支度してをり  
夕べ子の作りたるオニオンスープ我のものありて昼に飲みたり  
母の日の夜に帰りたる子に貰ふカーネーションの束とケーキを  
ペランダの奥まで日差し届かなく柵に乗せ置くゼラニウムの鉢

スーパーへ行く道けふは行き帰り歩道橋を渡ると歩く

「感謝」を抱へ

櫻 井 一 江 東京

右ひだりタワマン並ぶ散歩みち新たに建ちぬ筒型二棟  
町内にタワマン建設交渉の進む区画の広がり続く  
年上も一つの理とし「退会」の告ぐる勇気を絞り出したり  
定年の無き「会」去るは意外にも他より問はるる何ゆゑ等と  
夫亡き身となり周囲の応援歌受けつつ早も十八年余  
怠けぐせ進むを常に阻止せむと戒め者の声の高まる

「人生は終りの前に続くあり」聞きたる言葉こころに置きつ

声の出る見える聞こえる物持ちて歩いて行ける「感謝」を抱へ

有 泉 泰 子☆ 山梨

父方のたった一人の従兄弟逝く幼き日々の笑顔そのまま  
祖母中に叔父叔母そろい映りいる写真のみつかる我高校生  
ゆつくりと訪ねてみたしと思いつつ実行せぬまま従弟逝きたり  
本箱にしまいおきたる『優しい肴』取出し読みいく今夜のおかず  
桃ぶどう楽しみに待ちくれし従弟よ笑顔の浮かぶよ寂しき年ぞ

青 木 初 子 神奈川

二年前に用意をしたる障子紙なかなか貼れず日日流れたり  
貼りてある障子の紙の劣化して小き力に穴の開きをり

訪れる客の予定のあらざれば障子張替ふ吾の連休  
腰を庇ひ一日の仕事は九十分四枚の障子二日に終はる  
張り替へたる障子見るのは吾ばかり心満たさる自己満足に  
部屋内に冬越しさせれば君子蘭三月には咲く今年は無理かも  
鉢中に助かるもあり君子蘭枯葉の中より蕾立ち来る

中 村 晴 美 茨城

新緑の眩しき季節の到来に車の窓開け山へと走らす  
その土地の名物料理注文す財布の紐の旅先に緩む  
ガソリンの補助金続くは何時までかホルムズ海峡いまだに封鎖  
無理やりに平時を保つ様に見ゆナフサ不足無きとの声明  
白黒の印刷袋の菓子が出て本当はナフサ不足の疑惑  
耳鳴りと頭痛と同時の目眩せし黒き雲湧き激しき雷雨なり  
ミシミシと長く弱く揺るる夜また東北に強き地震

橋 本 文 子 鳥取

一人では外出をせぬ我が為に娘は休日車で誘ふ  
高校の高き土手に溢れ咲くつつじに心の育つと信ず  
花しやうぶ濃き紫の咲き揃ひ人々の心に響くものあり  
鯉のぼり各家庭から寄せられて川沿ひ道沿ひ大空映える  
こどもの日鯉のぼりの歌唄ひたる孫も育ちて大学生に

休日の校庭に動く小さき音草刈りロボット効果を上げる  
ロボットが注文のお膳運びきて客が受け取るとすぐ戻りゆく  
何となく面白さのうち食べ終はり又来たくなる不思議な給仕

吉 田 綾 子 ☆ 茨城

土弄り久方ぶりに懐かしむトマトの苗をやさしく植えて  
新しい土に肥料とたつぷりの水を含ませトマト育苗  
一日の反省しつつ床の中しあわせ感じしばし浸りぬ  
庭中の義母の好みし芍薬のくれない極む今朝の小雨に  
満杯の鉢を見兼ねて直ぐさまに三個の鉢に株分けしたり  
気持良き五月晴れる日のつづく薔薇や芍薬咲き盛るなり  
リハビリを始めて最早六か月休まず真面目に行い通す

酒 向 陸 江 ☆ 東京

館林の小高い丘のツツジ園ガイドは歴史の話に夢中  
館林は五代將軍綱吉が二十年治めし城下と  
車窓より佐野の地名の目に入りて冬雷の友の顔の浮かべり  
足利のフラワーパークは藤あまた優雅な長藤ポリュームの八重藤  
見上げればなんじゃもんじゃとハンカチノキ大樹二本が花盛りなり  
ごまりて手入れに専念する女性よごれ気にせず客も気にせず  
クレマチスバラにしゃくなげ登り藤花にときめき一万歩あるく

ロープウエー乗らず登りし安達太良に今日は眼下に新緑眺めつ  
樹林いでガレ場の道をゆつくりと辺り眺めつつ向かふ山頂  
自己記録目指しひたすら登りたる過ぎし日思ひ頂に立つ  
溪流のみどりの響聞きて下る景色も花もあらたな感じ  
半月前枝影交差す散歩道葉陰が和む今日のひととき  
トランプの言は利と自慢、されどあがらぬ国民の声

伊勢めぐり

天野 克彦 大阪

伊勢の海はるかに富士の浮かぶみゆ稀なるすがたあり難きかな  
青々と晴れとほりたる伊勢の海巨大な船がしづかに進む  
西行の草庵跡と伝へる西行谷を汗してめぐる  
君が見し二見ヶ浦の夫婦岩変はらずあれど見し人ぞなき  
君あらぬひとりの旅は寂しかり岩に碎ける白波高し  
大鳥居潜りてまたぐ五十鈴川木造り宇治橋かしくみ渡る  
水底を透かし流るる五十鈴川襦ぎをせんと手を浸しみつ  
神宮は太古の森があればこそ人をつつみて気高くありぬ

高松 美智子☆ 栃木

実を付けぬ柿の木まわりを耕して五株ほどのカキ菜を植える  
摘み時を逃したる菜花丈伸ばし目に柔らかな黄の花揺らす

散歩する母のうしろにつきゆけば花に声掛け童歌うたう

二本杖コツコツとつき老い母はお馬の親子をポックリポックリと歌う  
顔かたち母似の弟性分は父譲りなり目配り気配り  
並びいる父と弟耳たぶの形がそっくり細部に遺伝子  
生きることの予習と復習しみじみと卒寿を超えたる親の達者に  
初物のたけのこ四本大鍋に糠入れて茹でる火の番なしつつ  
顔しかめ大きく伸びして欠伸する生後ひと月この世の手ざわり

高橋 説子 栃木

春の蚊のひとつ吾が手に止まったり産毛に覚ゆる微かな重み  
二の腕にフライング気味の蚊がふはり夏までがんばれこの細き針  
「鉄でなく手で優しく」と言ひし夫われが牡丹の花殻摘むとき  
震度五の北海道のその揺れを速報見つつ足裏に知る  
十三年乗りし愛車を手放しぬ延命修理費高騰に付き

「この色はジーンズブルー」とディーラーの言ひし微妙なる愛車の水色  
「腱鞘炎にまたなるかもね」「腱鞘炎になるに決まつてる針の持ち過ぎ」  
「死は長いかくれんぼ」とはなるほどね吾はもちろんまだ鬼がいい

大塚 亮子 東京

野良猫かこの頃わが庭横切りて日に幾度も行き来してをり  
近隣の人らと話し保健所に引き取り依頼することとなりたり

「ごめんね」と謝りながら保健所に引き取られゆく子猫見送る  
糧をひとつ手折りて茶道の友来るを待ちをりたつぷり水揚げをして  
買ひ来たる百合の蕾の次々と咲いてくれたり香りかすかに  
わが庭の青梅今年は豊作で丸々育つを嬉しく見上ぐ

末つ子の私が八十三となり上から順に三人逝きたり

中学一年で母を亡くしし吾なれど二人の姉に育ててもらひし

ヒヨドリの声

嶋田正之 埼玉

ヒヨドリの声のんびりと花曇るホルムズ海峡封鎖のつづく

遠き地の出来事なれどホルムズを孫の会社の船通過とぞ

鉢植ゑの薔薇の苔に紅の増す風の音なく銃声のなく

日々に履く散歩シューズを洗ひ居り電線に来て雀囀る

路の臺いつの間にか花の枯れ茎を伸ばして萎れゆきたる

新調のセーラー服に両親も正装をして入学式へ

恥ぢらひの表情浮かべ艶やかなポニーテールを背に揺らして

携帯のゲームに遊び不登校悩みたる親晴れやかな朝

良かったね声掛けやれば涙ぐむ両親とゆく肩掛けカバン

江波戸 愛 子☆ 埼玉

この年も窓の高さに伸び来たる芍薬の苔すこし膨らむ

芍薬のつぼみのまわりを歩く蟻つぎつぎ入りゆく苔のなかへ

苔よりいで来て歩きまた中へ入りゆく小さき蟻をみている

茄子苗を植えたる娘その鉢に夫の植えるマリーゴールド

金柑の若葉を見ている夫と娘寄り来る蝶と鳥を言いおり

カレンダー片目瞑れば文字二重両目に見れば何事もなく

娘らに言われて来たる眼の医者は白内障と静かな声で

間隔を5分あけてと言われたる三種の点眼時計みながら

ブレイクあずさ☆ カナダ

「お姉ちゃん」幼きわれのそう呼びし従姉の死を知る春の夜ふけに

定型文選んでしまぬ従姉との思い出あふれ言葉探せず

この町に稀なる雷鳴夕立に従姉の生家の龍神思う

境内に従姉とぶらんこ漕ぎし夏つま先高く空へ空へと

龍神を祀る神社の夏休み子供時代はまた遠ざかる

たどたと雁の雛ゆく時折に確かめると親鳥見上げて

冬雨の名残の雲を追越して南の国より燕ら戻る

戦争に殺さるる人の数知れず殺さるる鳥は誰も数えず

橘 美千代 新潟

突風に倒れてゐたる大き鉢ツツジとトネリコそのままにおく

昼過ぎよりメイストームにはか吹きすさび植木を倒し傘立てさらふ

開院の二十周年祝ひにとスタッフ等に贈らるホールのケーキ

開院二十周年祝ひに贈られてケーキ分けあふ夫と娘と

開院し二十年経ち高齢の常連患者さん等いま亡し

ただ一つの受精卵からこの愛しき赤児となれる生命の奇跡

窓あけて夜風入りくるひいやりと香るオリブの爽やかな風

刻々と広がり消えゆく飛行機雲そのもとに向けハイウェイをゆく

鈴木 やよい 東京

一輪挿しに不釣合なる大き牡丹ゆるむ花卉を辛うじてとどむ

折り重なり落ちたる牡丹の花びらはふつくら丸む形を残す

風をうけ奔放に泳ぐ群れのなか綱に絡まる鯉をほぐしたし

子の通ひし神社傍なる保育園ピンクの平屋は昔と変はらず

ポリ袋を急ぎ求めて来たはずも紫陽花抱へて出るホームセンター

狼が守り神だといふだけに体引き締まる狛犬のをり

ケーブルを降りて買ひたるきび餅一つバスを待ちつつ半分に分く

中村 哲也 宮城

連休のなか日に日帰りバスツアー気分は遠足年甲斐も無く

構内に喰ぶる掛け蕎麦一杯の値の高さや少し戸惑ふ

駅出でて居並ぶバスに今日ひと日ツアーのバスを探してまはる

相席は景色を見ずに乗車中スマホの画面を眺めて過ごす

乗り換への手間無く行ける「大ゴッホ展」割高なれどツアー良きかも

道の駅自由行動人込みと暑さを避けてパスにて過ごす

しつかりと保険に入りて行くツアー遠出の折のいつものやうに

野村 灑子 千葉

人格の変わりたるかと思ふほど目つき鋭くなる女を哀しめり

歩行器ごと倒れたる吾は電柱迄にじりよりやうやく立ち上がりたり

看護師は慣れたる手付きに洗ひ終へ体の下の板をぬきたり

「サアコイ」と湯上がりの患者等を待ちをりてバスタオルに包み引き上げて行く

通勤に急ぐ人等は倒れある吾に手を貸しくくるなかりし

体調の不良をきけば四姉妹の様子昨日迄元気だつたとは言へず

田端 五百子 岩手

白梅のほころぶ廃屋窓越しの黄ばむ曆を風ひるがへす

退職記念と夫の植ゑたる白梅は千の蕾を徐々にほごき来

赤いコーン行く手を塞ぐここより先クマ出没す注意要すと

ぼたん雪張り付く窓を振り返り咄嗟に言ふべき言葉忘れる

石段に落ちる春の陽踏みしめて昇る境内鯉のぼり泳ぐ

卒園式来賓席のすすり泣き周囲連鎖しハンカチ上下す

湿り帯ぶ朝刊めくれれば立ち昇るインクの匂ひと世相あれこれ

山本 三男☆ 群馬

予想より早くカマキリは孵化したりアブラムシなどまだ見ぬ時期に

孵化したるカマキリ細し次々とくさむらに散りいずこかに消ゆ  
散歩路にモンシロチョウが飛びいるを今まで気付かず歩きていたり  
老人にふさわしからぬ虫かごをダイソーに来てわれは買いたり  
凝り性のわれはこの頃チョウに凝りアオムシを部屋で育てていたり  
いつ見てもアオムシは動く様子なし葉は少しずつ食われておれど  
今朝見ればサナギ支える糸ありてアオムシの顔の模様消えおり  
税金の通知届けばすぐさまにコンビニで払うわれの性分

飯塚澄子 東京

ふくらめる封筒の「冬雷」付録付き『陽だまりの庭』即読み終へぬ  
細き枝にオールドローズの見事なり心引かれて朝夕眺む  
寝床での宇宙の視野を奪はるる若葉紫木蓮日々葉を広げ  
小六の曾孫娘のみやげとす絵入りの多き手拭き和紙をば  
朝夕の歯磨きをせず食事のたび歯と口漱ぐ日々の我なり  
見事なる花咲かせたる大き椿さらにもう一つ花を付けたり

飯嶋久子☆ 茨城

たゆまずに続けし声のボランティア「こだま」表彰の知らせ受ける  
眼の見えぬ人たちへの声のしらせ思えば長し四十五年  
「緑綬褒章」その名も重き賞なりと興奮の声スマホに届く  
現役を放れて嬉しく後輩は事あるごとに誘いてくるる

テープにて市報録音が始めなり今対面朗読主流となるか  
「いば6」に放映ありと知らせきき録画設定おこたりなし  
見事なる蘭贈らるるひるさがり少し重荷枯らさぬように

戸部田とくえ 福岡

さ緑の繁る芹とふきの臺夕べの菜に庭の御馳走  
ふきの葉で清水を飲みし遠き日の仕種のうかぶ繁るを見れば  
齒科検診子に連れられてこのたびも受けて役目の逆さとなり  
花の咲く草の名しらずただ見入るあとで必ず調べておきます  
友よりの届くつくしのハカマ取りをすませて隣りに裾分けをする  
とりどりの色あざやかな金魚草みればけふも元気に幸せ

稲津孝子 福岡

いつの日か手入れせむとぞ思ひある義父の刀のあり新聞紙に包みて  
人をらぬ池に水の輪ひろがりて消えてゆきたりまた歩き出す  
子育て支援の地域の役目に少子化に我なりに努力せし事ありき  
横浜の夏休みの孫もちきたる蚕が夜に糸を吐きし音  
通ひるし商店街のガラスケースの中のティアラに夢見し少女  
茹でてゐる麦麺一本箸に取り壁に付けばよしと母言ひてみき  
岩手県大槌町の山の火事崖落ちてくる火の松陰囊  
会ひに来る五十年ぶりのドイツ人の友にメールすチャットGPTにて

江藤 ひさ子 大分

長男が妻子と共に帰省して行き成り快活けふの昼食  
幼き頃の家族制度は疾うに無く長男家族と久方振りの食事  
兄嫁の四十九日の法要に集ふ内輪と和む仏前  
締め切りに後押しされて月々の短歌の投稿吾の習性  
庭の木々微動だも無き日照を紋白蝶が舞ひ舞ふ暫し  
日照に椿の新葉きらきらと光を放つ今日の終日  
埼玉の次男夫婦が帰省して夫と吾を連れ行く昼食

姉川 素枝子 福岡

忙しく変はる世の中無常といふ方丈記時に口遊む  
くれなゐの桜を言はず染井吉野老たるを言ひ開花をいへり  
衰ふ目なげけば豆球とりよせて拡大鏡につけてくれたり  
微笑みて逝けば良いねと言ふ吾を薄気味わるしと息子しかりぬ  
帰るとて靴はく息子に須臾<sup>す</sup>みゆる心のかげを言ふことはなし  
嫁の胸の腫れもの早くみつかるを神の差配と慰めあへり  
数独がとけたとはまる単純と短歌の単純化軽重いづれ  
普段着の歌を作れと教はりし師の面影の遠くなりゆく  
久留米また高さを競ふ塔屋の並ぶ師をらばとつかのま思ふ

井上 菅子 山形

桜色の毛糸にセーター編みをれば時折混じる猫の白き毛  
庭の連翹路傍の菜の花輝きて極楽一丁目弥勒通りは  
紫木蓮の厚き花弁崩れ落つ栄華の果ての亡びのやうに  
夫のシャツ逆吊りに干し春風に嫋らせてある団地の妻は  
膨らかな腹を揺らして白昼を狸が来るよわが帰る道  
雉子が横断してゐる道路わが車踏めば領域侵犯にあらずや  
手間かけて貼りたるだらう正札を手間隙かけて剥がす造花の  
大振りのそい釣る甥の機嫌よきときの冷凍もらひて帰る  
満開に咲けば桜は散るのみの春に大事な人失ひし

井上 榎子 新潟

檀家らとかかはる歲月長くして時には一人の暮しに憧る  
寂黙のごとき生活あはずして我の強きわれは修行のたらず  
生活の苦悩や動揺重なりて桜咲き散る好機を見逃す  
嫁ぎ来て寺院の利点は歌作る得難き題材捉ふれば良し  
観音講の長き読経の折折に眠気覚しの山鳩の声  
生り年の筍掘りに浮き立ちて夫と連れ立ち鍬振りかぶる  
筍の匂ぐみが魅力と言ふ夫の所望に刺身と夕餉にきざむ  
晴れゆかん明日を思ひて怠惰なる今日を悔みてはや眠りたり  
寝につかんわが部屋にして春の日の温み残りて緊張ゆるむ

(☆印は新仮名遣い希望者です)

好きなことのひとつは黙々と歩くこと  
 国分寺探検まだまだ続く 赤間洋子  
 歩くことに楽しみを見つけた作者。健康を保つためでもあるのだろうが、まず歩くことが好きになった。歌からは前向きな生き方が感じられる。街の探検を楽しんでほしい。

冬を越すキャベツの味噌汁やはらかし  
 うまみのあるをみそ汁に思ふ 兼目久  
 畑で育てた冬越しのキャベツは甘みを増して美味しいそうだ。そのキャベツで作る味噌汁は柔らかくてほのかな甘みもあり、しみじみと旨い。充実したひと時をゆったりとした調べで詠んでいる。

まだまだと言はるる内に身を退くがわ  
 たくしなりの役の辞し方 櫻井一江  
 何かの役員や委員の仕事長くこなして来られたのだろう。まだまだ引き受けて頑張れるのだろうが、この辺りで身を退くことを良しとする。人生においてこ

うした退き際も大事なのだ。

放牧場の広き跡地に我が植えし河津桜  
 は大地を覆う 吉田綾子☆

両の手で杖を握りて仰ぎ見る花の間に  
 みどり葉のぞく 同

以前酪農の仕事をしてきた作者。放牧場の跡地は懐かしい場所だ。そこに植えた河津桜が大きくなり生命の力を見せている。愛おしむように桜を見上げていて作者の姿が目に見え浮かぶ。

「いつでも来てね」の言葉に甘え友の  
 家マツサージチェアーに背中ほぐさる

高松美智子☆

気兼ねなく付き合える友の家にはマツサージチェアーがある。利用させてもらうと座っているだけで体がほぐされ、疲れも解消する。友との長い間の良き間柄が偲ばれる。

窓口の人の手借りず会話せず機械操作  
 に年会費納む 高橋説子

確かに振込みなどは機械の方が手数料が安い。しかし作者にすれば少しでも会話して窓口で払う方が楽しいし、落ち着

くのだろう。誰とも話さず機械操作だけで振込みは出来るものなんとなく物足りない。そんな気持の出た一首。

メールにて結婚式の案内状かうして紙  
 の文化薄らぐ 嶋田正之

結婚式の案内状という厚めの封筒で送られてくるのが普通だったが今はメールでの案内状もあるらしい。紙の文化はどうなるのかという嘆きに共感する。

歩行器に歩めばのぼり坂ありて押すと  
 いふこと別に加はる 稲田正康

歩行をサポートしてくれる歩行器も慣れるまでには大変なのだ。屋外に出れば歩道に段差もある。登り坂に差し掛かれれば押す力が必要だ。「押すといふこと別に加はる」に実感が出ている。懸命に歩行と取り組む作者の姿に心を打たれる。

風雪の止みたる夜半の窓越しに裸木の  
 上の月際立てる 井上楨子

吹雪が止んで静まり返る夜半、そっと窓越しに外を見れば裸木の上の月が凍るような光を投げかけている。寒さの厳しい冬の夜の風景を写真で捉えている。

## 鮫島満歌集

### 『虎耳草』を読む

桜井美保子

『忘憂賦』に次ぐ著者の第七歌集。あとがきによると歌集名となった「虎耳草」とは白い五弁の花を咲かせる「雪の下」のことで葉っぱが毛を纏っており虎の耳に似ているそうだ。日頃著者が親しんでおられる植物なのだろう。

本集は2016年から2025年まで1年ずつ区切りがあるが小題や詞書は全くない。一首一首が独立性を持って、きっぱりと置かれている。

垣越しにトラが来てねといふ聞こゆ  
 酔客のことならずば猫か  
 藪の字に潜む女は何ならむよき乙女  
 はた山姥なるか

一首目、「トラ」は酔っ払いを指す俗語。酔客でなければ「トラ」という名の猫か。そんな話に聞き耳を立てている作者。二首目は漢字一字からの発想が面白

い。「藪」の中の女は謎めいている。

箎に盛るほどのタラの芽フキノタウ  
 採れば即ちいのち若やぐ

山菜を摘んで来て食べるのも春の楽しみである。天ぶらにするのが殊に旨い。まさに命が若やいで来る。

盆ほどの水も鳥持つ大湾もこよひは  
 月をとらへるべし

庭に置く野鳥用の鉢皿などに湛える水も大きな湾の水面も今夜の皓々と照る月を映している。水が月を「とらへるべし」としたのがいい。棚田の「田毎の月」を思い出させる作。

こうして読んでいくと次々と面白い作品が目にとまり引き込まれてしまう。  
 どぶろくの密造謀りし友らみな老いてわづかの酒にし乱る

万願寺唐辛子なにを怒れるやことごと  
 と烈しく身をし振れり

放る物をはふらで出だす居酒屋にガツの塩焼きあがるを待てり  
 一首目、経済的に晩酌をする余裕がなかった戦後には自家製の酒を作っていた

家が多かったという。そういう時代もあり、今や老年となった友らは酒を楽しむ余裕があるのに少しの量で酔い乱れる。二首目の万願寺唐辛子は美しい緑色で少し捻れている。拗ねているのか怒っているのか。三首目の「ガツ」は豚の胃の部分を目指す言葉。「ホルモン」を「放る物」としたところが楽しい。

明石蛸の串刺し一本焼かして立て  
 ながら食ふ旅にしあれば

旅宿の外湯の廂は落つる葉の音さへ  
 伝ふはからひやある

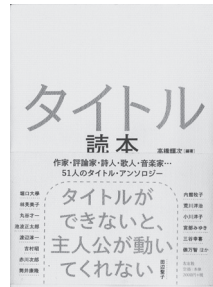
旅先での二首。明石蛸の串を立ちながら食べる旅の楽しさ。外湯に浸りつつ聞く落葉の音。ああ、ここまで訪れる人を楽しませてくれるのかと。

また母を詠んだ多くの作品には心を打たれた。再読を楽しみたい一冊である。黄昏を遊び呆くるわが名呼ぶ母の懸命の声なつかし

母の背に着ける草の実取りしさへ記  
 憶の池ゆよみがへる日よ

## タイトルを付けるのは難しい！

高橋輝次



タイトルないし題名というテーマは、小説家や映画、演劇、音楽などあらゆるジャンルの表現者にとって大切なものであろう。むしろ本好きの人や観客にとってもそれが最初に見知る情報になるのだから関心は高い。実は、私も二〇一九年に左右社から編者として『タイトル読本』なるアンソロジーを出版した。

本書は活躍中の小説家、詩歌人、評論家、音楽家、編集者ら総勢51人が各々書いたタイトルについてのエッセイを

一冊にまとめたもので、今読み返しても面白い。ただ、内容が多岐にわたるので、私の部分的で偏った要約になるのをお許し願おう。

まず、多くの作家が様に述べられているのが、タイトルを付けるのは実にはむずかしい、という事である。各々が自身の苦心談を正直に告白しているが、同時に他の作家の題名で感心した具体例もいろいろあげている。

タイトルは小説の顔だし全体の象徴でもあるから、それがうまく決まると、どんどんイメージがふくらんで筆が進むという作家が多い。

例えば田辺聖子は、小説の題に拘泥する方で、「タイトルができないと、主人公が動いてくれない」と言う。平易な表現を心がけているので、「いきおい平仮名が多くなる」とも。例えば『夕ごはんたべた?』『中年ちゃんぼらん』『窓を開けますか?』等々。前者などは知人とそのご主人との会話

からその場で題を頂いたそう。ただエッセイ集『言うたらなんやけど』の場合は、読者が本屋に行つてその題名を言つても、会話の出だしたと勘違いされて何度も聞き返されたという、愉快な失敗のエピソードも披露している。田辺さんが内容にも時代にもびつたりした、と思いついたのは村上龍の『限りなく透明に近いブルー』と田中

康夫の『なんとなく、クリスタル』だと書いている。宮部みゆきも、タイトルが決まらないと、何も考えることができない、と書き、松本清張の『点と線』や『砂の器』のタイトルを名作だと絶賛している。清張といえば、同じ推理小説作家の斎藤栄も『眼の壁』や『霧の旗』『Dの複合』などをあげ、前後の漢字が全然脈絡がないものであり、俳句的な付け方であると言っている。

私が一時はまって読んだ作家、円地文子は有吉佐和子の『恍惚の人』をあげ、それが一般の人に与えた大きな影

響を指摘している。その後、老人の肯定的、積極的側面を強調した赤瀬川原平の『老人力』が出て話題になった。最近では内館牧子の『終わった人』や『老害の人』などがズバリ高齢者問題に切り込んだタイトルで面白い。また太宰治の『斜陽』も戦後の世相の激変を映し出し、「斜陽族」などの日本語として定着した、とも。太宰については、小林信彦も小説の全ジャンルを通してタイトルのうまい作家と評価しており、『人間失格』『晩年』『お伽草子』『トカトントン』などをあげている。

『愛についてのデッサン』などでも今も熱いファンがいる野呂邦暢は、本書中では珍しく、ヘミングウェイの題のつけ方の旨さについて種々述べている。『武器よさらば』や『キリマンジャロの雪』『老人と海』などをあげ、とくに前者は題名を決めるまでに二百以上の仮題を並べて思案したと言うから、凝りに凝っているのではないか。

そういえば、私は巻末に二段組で10頁にわたって書いた解説で本文で触れてないエピソードをいろいろ紹介しているが、日本の作家でも小林信彦が類似の話を告白している。書下し小説の『世界でいちばん暑い島』を出した折、ある書評家が、これが森村桂の『天国にいちばん近い島』に似ていると非難したので読んで、氏も担当編集者も唾然としたと言うのだ。実はこの題名は百二十もの案のうち、当世人気の女性グループ、プリンセス、プリンセスの大ヒット曲「世界でいちばん暑い夏」から思いついたものだったのだから。

さらに川本三郎も、書名は映画や歌の題名をもじることが多いと述べる。例えば最初の本『朝日のようにさわやかに』はジャズの名曲からそのまま取つたし、自伝的エッセイ『マイ・バック・ページ』はボブ・ディランの歌の題名のままなのと言う。

一方で映画化もされた『蜜蜂と遠雷』

などで人気の高い恩田陸は、小説のタイトルを考えるのが好きで、いつでもノートに幾つもタイトルを書き溜めており、それだけでほとんど小説が書けた気になると言う。恩田さんは素晴らしいタイトルとして、原作と映画両方の『羊たちの沈黙』をあげている。とても知的で神秘的なタイトルだと。私も同感である。

最近も『生きる言葉』を出して活躍中の依万智は早大生時代、短歌をつくり始めた頃に大学図書館でふと出会った松田さえこの歌集『さるびあ街』の新鮮なタイトルに魅かれて読んだのだと言う。最後に、引用している数首から一つだけ孫引きしておこう。

〇さざし来る悲しみに似て硝子戸に

をりをり触るる雪の音する

この松田さんは後に筆名を尾崎左永子として、脚本や作詞、源氏物語に似ての様々なエッセイも書いて活躍した人なのである。

# 作品一

雷雨

桜井 美保子 神奈川

買物を終へて出づれば駅前空暗くなり大粒の雨  
雷鳴の激しくなりて路上打つ雨強くなるたちまちにして  
冬雷に居るゆゑ雷の語は親しされど打たれて死ぬのは困る  
雷の落ち着くまでを待たむとすスーパー出口に立ちて動かず  
晴雨兼用傘を持てども雷の激しき時に差すは危ふし  
雷神といふものゐるかと思ふほど稲妻現れ雷鳴響く  
歩道橋に登るエレベーターの入口に雷雨の中を駆け込む人ら  
落雷を受けてタイムスリップせる侍の映画思ひ出しをり  
ミルクティー飲みつつ雷の去るを待つ濡れたる上着の袖を拭ひて

正田 フミエ☆ 栃木

雨が降る強く弱くをくり返し春の畑を潤しくるる  
早春になれど晩生の玉ネギは太る兆しが現れて来ず  
玉ネギの晩生栽培失敗か活力剤を掛けて見守る  
二百倍の活力液肥を数度掛く晩生玉ネギ春に目覚めよ  
待ちに待った晩生玉ネギ四月末に太りはじめて思わず撫でる

五月に入り晩生玉ネギふつくらと丸み目立ちて安堵するなり  
ふくらめるツツジの蕾色付きて冬を耐えたる勢いの花  
火のような紅いツツジが咲きたれば飽かず眺める感謝を込めて

斉藤 トミ子☆ 栃木

酒と塩車の四角に撒きながら安全運転肝に銘じる  
事故の歌読みて電話をくれる友後期高齢者なるを言い合う  
鬱鬱と気持の整理できぬまま山道来ればやぶ椿の花  
花吹雪舞う参道を歩みいし彼の日よ早も五十八年  
新聞の記事に知りたるストレッチやる事がよし続けよとあり  
太腿の裏の筋肉伸ばすという胸と太腿合わすストレッチ  
炊き上がる筍ご飯の香につられ孫の寄り来る常見せぬ顔

浜田 はるみ☆ 埼玉

トランプが辞任しました四月馬鹿皆の望みが川柳にあり  
スケッチの四月一日曇天で一時間半桜を描きぬ  
小雨降る隅田公園寒き中和装モデルや人力車走る  
予想より十年早く体力が無くなり母の言葉思い出す  
我と同じ齡頃の母疲れるからと仕事以外は出掛けなかった  
日々起きる殺人事件にこんなにも恐ろしき国になったものだと  
冬雷の五月号に私の歌載っておらずはてなと思ふ

花いかだ川の水面は桜色ゆつたり流るる何とみやびな  
花ふぶき仰ぎ見てゐる杖の人花びらうけてこぼれる笑みぞ  
桜めぐり無事に終はりてあ嬉しこの体力は有り難きかな  
我が背丈とうに越したる女孫たち家事分担す母を助けて  
古木なる樟ありてはらはらと赤き葉が散るあなはらはらと  
つややかに日毎に伸ぶる半化粧六十本あり数へて見れば  
いち早く商店街の空およぐ子等の作りし小さき鯉のぼり  
見上げれば雲一つなき青き空春のそらは柔らかなりて

アリシアさん

林 美智子☆ 東京

フランスより前客のいとこ来日す若き女性の一人旅なり  
我が家に三度目なれば打ち解けて食後の片付けサクサク早し  
朝九時と夕七時にはちゃんと来て残さず食べて我を喜ばす  
料理本の中華おこわをリクエストさる亡嫁の得意な料理懐かし  
中華おこわレシピ片手に作りみる上手にできて皆大喜び  
亡嫁の計らいなるか我が料理来客のためやや腕上がる  
亡嫁とアリシアさんの着物姿写真にありて二人美し  
十八日を我が家に過ぎし片言の言葉尽くしてアリシアさん帰国

松 中 賀 代☆ 高知

遠くから甘夏の花匂いくる自然の中で自然に育ち  
押し車に水を運ぶは初めてでゴーヤピーマン新芽を伸ばす  
窓ごしに見る子育ての親鳥は必死に餌を雛鳥の口へ  
草刈りの一通り終えやれやれと思う下には次の草出る

本 郷 歌 子☆ 栃木

骨削り切れた筋肉縫い留める右肩の腱板断裂の手術  
今の世に生きる幸い手術後の痛み薬の効き目灼か  
腱板断裂の手術の傷は縫いもせず包帯もせずテープで留める  
娘にはゾンビみたいと笑われる手術後の内出血は腕全体に  
手術後のシャワーの許可は翌日から傷のテープにそつと湯をかける  
左手で左の腕は洗えない右手は使えずヘルプがほしい  
病室の外は晴れやか名の知らぬ鳥は飛び行き桜の花散る

村 上 美 江 岩手

前ならば母の強さもあつたはず息子の手術は吾が痛みとなる  
父親の厳しき強さを暫くは忘れてゐしか息子の態度  
その病「悪いものではない」からと四日間の入院決まる  
三年毎息子は手術を受けにけり年齢による既往歴見る  
教習所「認知機能」のテスト受く桜吹雪はコースを埋めて  
雨上がりさくら満開の教習所玄関開ければ花弁も入る

十八の年齢より免許いただきて先づはバイクで納品をせし  
五十年以上過ぎたる学校の変はらぬ校舎変はらぬ信号

伊 澤 直 子 ☆ 東京

モネの師と知られるブーダンの展覧会損保美術館に出かけてみる  
海に映る夕日の色彩モネの絵に見覚えのある気のある眺める  
二週間後今度はモネの展覧会印象派に移りゆく中ブーダンの影  
モネ展を物想いながら見て歩き閉館時間にシヨップに急ぐ  
母の日というて真紅のカーネーション娘の名前で送られてくる  
カーネーション陽光と風を好むとか毎朝日に当て水やりをする  
落ちついた焦茶基調の店内に若きウェイトレスの気持よく動く

乾 義 江 ☆ 茨城

待ちわびし眼瞼下垂の手術に挑む姪と向かうは形成外科に  
局部麻酔に医師との会話成り立ちて瞼にメスを一時間余り  
無きに等しい術後の痛み有り難し眠剤飲みて院にて眠る  
数本の細きテープに止めらる歌舞伎役者のごとき赤き目の縁  
抜糸終え快気祝いと銘打ちて姪と寿司屋に舌鼓打つ  
近隣の舗装道路も完成し自転車に走る子供の笑顔  
歩道の接ぎ手自転車に踏めば内臓が飛び出る程の衝撃を受く

果実

松 本 英 夫 東京

朝朝の「ペールギュントの朝」聞く子らの記憶の底へ深くさやかに  
子ら下校多き荷背負ひ手に持ちて五日学べる果実豊かに  
生徒たち終業式を退場す日日聞きたる「大きな古時計」に  
春風に日の丸の旗ひるがへり「旅立ちの日に」校庭に沸く  
雨よ止め土入れ白き線を引き練習かさねし運動会はじまる  
子らのバチ五輪音頭に合はせ鳴り運動会の盛り上がりゆく  
読み疲れ歌書とぢたれば耳に入る高き声援徒競走らし  
小六の登校忌避に友だちは涙あふれて「声をかければ良かった」

中 島 千加子 東京

夕暮れの河辺の道を歩きをり花にら白く足もともす  
気が滅入り眠れぬ夜にはポンポンで人形作りもう半年の経つ  
役立たずだから亀が好きといふエンデの「モモ」に人形捧ぐ  
月一度まちのマルシェで読み聞かせ欲しい子にあげむポンポン人形  
四月末売られ始むる芍薬の蒼は立派な大玉ばかり  
7年前の5倍の値段となる芍薬ガラスケースの奥に置かれる  
掌にのせられるやうな紫陽花の大きく育ち色づくを待つ

永 光 徳 子 ☆ 東京

年若く逝きたる姪の葬儀終え見上げた空は茜に染まる  
壮大な茜の空は穏やかに姪の御霊を包むかに見ゆ

夕ぐれの雲の流れはゆったりと西へ西へと流れて消ゆる  
空が好き青空が好き星空も月や火星はそつとおきたし  
その空に爆弾積んだ軍用機飛ばす国あり砲弾も飛ぶ  
暫くを家空けおれば吾が庭はサバナの如く雑草茂る  
母の日のプレゼントよと花の苗あれもこれもと娘は選ぶ  
プランター鉢も大小取り揃え花苗植える至福の時間

大塚 照美 兵庫

掛算の「九九」を朝あさ暗誦すテンポ良ければ親指たてつ  
扉の上にしぼしとどまる野良の猫つかのま目が合ふされど通りつ  
厨辺を早く片付けラジオなき部屋に眠りぬ杖を離れて  
「長い座位」短い歩行が一因」とふ腰痛の記事返す言葉なく  
いつにても自転車降りてにこやかにご挨拶ある谷口さん嬉し  
手作りの洋服小物の店に寄る楽しみがあり通院の道  
をちこちより新のたけのこ戴けり匂を忘れぬ友のぬくもり

三好 規子 福岡

一年経し施設に横浜の家族みなが一年振りに会ひに来て呉る  
寝込みたる時に備へよと下着類を買ひに娘が付き添ひくれぬ  
四月より孫らは京都と大阪の大学むすめは夫婦のみになる  
四月より子は福岡より熊本へ転勤と知り家族おどろく

博多より新幹線にて熊本へ通勤すと子は事もなげに言ふ

五〇〇万本とふ見霽かす菜の花が青空に映えその香ただよふ  
夢見草は桜の異名ゆめ見鳥は蝶と知りたり今朝の豫報士に

佐藤 靖子 東京

夏めける光に砥草の茎の色うるほひ増せる濃き青緑  
寂しげなまなこの馬の速足となれば後軀はほがらかに見ゆ  
いろいろの稚魚あるなかのひとくねりしてゐる姿さすがに鰻  
1.5以上の視力もつをのこ2にする眼鏡かけをりにけり  
みやげものフロランタンをたひらげて子らより受くるうらみとつらみ  
錠剤を含みたる時電話鳴りそのまま話せば口苦きこと  
ひとりのみ知らぬ作家のまじりゐるアンソロジーは楽しみの増ゆ  
山火事を象が消しゐる夢に覚めわれながらもふけしからなしと

齋 鹿ミヤコ 神奈川

ランドセル背負ひて通りに出てきたり入学前の向かひの男の児  
はす向かひに一週おくれて芽をだせる柿の葉の色そろひてゆけり  
カーテンをあけて過ごせば柿の葉の拡がるみどりそれだけでよし  
玉ねぎの簡単レシピを教へらる防犯パトロール中の仲間  
詰まりたるクロスワードを完成すたまたま来たる子のヒントより  
あなたはだれトレーニングされた大規模言語モデルですと応へてくる

去りてゆく少女に花束素敵ねと言へばこちらを向きて立ち止まりたり

須藤 紀子 埼玉

闘病の九年の末に従妹は輝く笑顔の遺影残せり

葬儀の夜遺影の妻とペランダで花火見てみるとラインの届く

幼子の歓声聞こえ来るとく若葉は風を受けてざわめく

ほろ苦き土筆は酔味噂和へがよし記憶の中に残るその味

咲き盛る野薔薇を切りて瓶にさす近頃花を愛づる夫が

鈴木 計子 東京

男性のコートの腹部ふくれみて中より赤児の泣き声したり

付け爪の長きままに隣席の画面操作のその指はやし

並びたる揃ひの和服に迎へられ少しとまどふリュックの吾は

案内さるる小部屋の卓に玉手箱おもはず縮緬包みの重あり

バッグより出たる宿の箸袋書かるる文字にまた温もりぬ

来たかつた奏楽堂に知る歌のあれこれ心はづませ聴けり

廉太郎も奏でしといふ奏楽堂けふのステージ「花」にはじまる

歌ひ方しぐさ歌により変へて楽しさ醸す歌姫たちは

石渡 静夫 茨城

美術館の前に待機の人力車は今日だけ無料の乗車体験

声の良い歌友がうたふ芸能祭背筋伸ばして「長崎の鐘」を

駐車場午前七時の開門と同時に入る陶炎祭めざして

陶炎祭の人の流れに溶け込んで二百店舗の中をさまよふ

陶炎祭の中央ステージに歓声が大道芸と司会の話術

工芸の丘に建つ碑は「絆の譜」高野公男と船村徹

碑に彫らる「男の友情」作詞者は笠間の出身高野公男なり

西村 邦子 兵庫

遠浅の海とサンゴ礁の川平湾グラスボートで海中散歩

夕暮れの宿より見ゆる川平湾青から緑のグラデーションに

竹富島水牛車にゆられ行くサンゴの石垣白砂の道

集落にブーゲンビリア咲き乱れ島風運ぶ三線の音色

三線の曲に合はせて水牛は西表島から由布島へと渡る

八重島の離島を渡る船上に夫と話す利尻島の旅

アダン葉で帽子編む人宿に来て夫のサイズを計りくれたり

植松 千恵子☆ 静岡

自転車の交通法を厳しくす車道を走れと老いには恐し

彼岸明け鍬新しくはずむ農春の種蒔きあれもこれもと

呆然と友の逝去の連絡ありはじける笑顔で辛そうでなかった

きれいだから病棟移るとでもそこは緩和ケアだった何も気づかず

戦禍より助けてあげたしアフリカの深刻飢餓の子供の惨状

軽やかな染井吉野と見比べてぼつてりとした感八重の大木  
徳子さんの「陽だまりの庭」引き込まれ心安らぐ優しいお歌

居候去る

永野雅子☆ 東京

義妹より息子の就職決まる迄部屋を貸してと相談されたり  
助けたいと引き受けたりし同居なれど気の休まらない日々  
後悔就活の彼は性格ナイーブで感情の波コントロール苦手  
面接まで行けたと聞けど不採用何度も続けば鬱になりそう  
就職先決まりて後は表情も晴れ胸撫で下ろす母と私  
義妹の子就職決まり引越す一年半の同居にピリオド  
休日に母と二人で茶飲みする日常と笑顔戻りて嬉し

川上美智子☆ 高知

食べ切れぬ程に貰いし筍を今ではスーパーに買い求めおり  
朝掘りの筍くれたる人ら皆老いの身となり杖持つ人も  
三百グラム四百七十五円の茹で筍につくづく思う友への感謝  
低空をイワツバメの群れ飛び回り囀る声の頭上に拡がる  
花びらを踏まぬようにと友の声野道に散り敷く朱色のツツジ  
友の足つま先立ちに一步二歩飛び飛び歩く花びら避けて

川俣美治子☆ 栃木

まんまるの綿帽子並び風吹かばほどけて飛ばむ気配をまとう

濃い薄い違いはあれどすみれ草春の終わりにそつと咲きけり  
青空に響くかえるの声追いて孫は歓声あげ探しおり  
音楽も聴かずに歩く散歩みち緑の濃さよ鳥の声満つ  
雨止みて青空広がるそのさまを見れば心も晴れわたりゆく  
聞こえる鳴き声たどればつばめおり伴侶探すか五月の空に  
孫たちの語りし夢のまぶしさに未来に幸あれただ願いおり

大野茜 神奈川

段葛歩みつつ望む山腹にベンガラ色の社殿きはだつ  
教へるの初めてと言ひ妻帰る太極拳に新人二人  
ひざ痛を治す運動スマホには幾十もあり三つを選ぶ  
坂下り農家の庭の直売所ブロッコリー手に硬貨を入れる  
見舞ひから帰りソファアに昼寝する身体傾きはつと目覚める  
水を撒く庭の水道凍る朝は七十年前に一度ありしか  
君子蘭雪の重さに耐へられず折れたる双葉を惜しみつつ切りぬ

本間志津子 山形

大

真東のビルの谷間に昇る日の曙光はまぶし今日が始まる  
鳶三羽それぞれの輪を描きつつ茜の空をゆつくりと飛ぶ  
退院は突然なりき公園の桜ちらほら散りゆく午後  
わが庭の紅きつつじと水仙の白き花花迎へくれにき

鳥海の冠雪深く中腹も雪に被はれ空に浮くごとし  
晴るる日の西に傾く日の光日和山より海へと移る  
西に向く向かひ家の窓に映る日の今し沈むか赤赤と燃ゆ

益坂順子 福岡

うす暗き谷間を彩る金蘭と海老根蘭さく金立登山  
花尽きし人影のなき公園の広がる若葉の色のさまさま  
山法師の花に誘はれ登りたる彼の山やまを思ひ出しをり  
我が庭の赤き五本のアマリスながむる朝の心晴れやか  
友よりの小鯨十尾は料理済み直ぐに始むる南蛮漬けを  
子と孫と曾孫までも羽織たるお宮参りの紋付衣裳  
南北の窓開け放ち絨毯の片付け終り笑みのこぼるる

梶尾栄子 兵庫

シベリアに抑留されし人残す白樺の皮に書く数多の短歌  
軒下に二羽のつばめの巣作るを木に居る鴉が狙つてゐるよ  
外来種多く見らるる蒲公英の出自違へど同じ黄の色  
散歩道耳をすませて聞く初音こころ辺りで去年にも鳴きゐし  
隙間なき囲ひの中に馴じみたるイオン解体もう屋根見え  
覚えたる菊根分けとふ季語けふは実践してゐる畑に来ては  
亡夫在らば踏台無しで届く棚難儀して居り物の出し入れ

高橋燿子 ☆ 埼玉

ゆつたりと白い花びら舞い降りてハンカチの木に遠き日想う  
例年より早い開花とか散りゆくハンカチの木を惜しみて見ている  
ピンクの帽子の一团が「これなあに」「触ってごらん」竹林に声がひびく  
筈を囲み写真撮る園児僕の方がと背伸びする子も  
窓に見るのどかな景色楽しかり子等に加わりときがわ目指す  
鯉のぼりお地藏様と目を移す夫の回り緑がひかる  
床の間に武者人形が厳めしく総勢十人共に撮影  
欲しい物ないと答えた母の日に虫除け作業着贈られ感謝

野崎礼子 ☆ 埼玉

値上げと聞き四月間近の夕間暮れあれもこれもと買い込んでおり  
脳トレと書いて習う中国語目新しきことなくも飽かざる  
夫が言う今の悩みは太れぬことぶかぶかズボンひとまずしまいぬ  
トゲトゲの心今日は極まりて夫の一言胸に残りぬ  
ご褒美と言いながら頬張るメロンパンエアロビクス終え口福広がる  
財津和夫あの声聞けば胸ふるう我が青春とともに過ごせり  
朝の散歩「青春の影」を口ずさみ歩み軽やか腕振りゆく  
ポルトガルの土産あければ金平糖赤青鮮やか舌にほどける

春風に高尾の山の杉花粉難儀してるが  
杉を憎めず 永光徳子☆

春になると多くの人を苦しめて作者自身も苦しんでいるスギ花粉だが杉の木を憎む気持ちに成れないという。杉は真直ぐにのびる樹形も美しいし、日本にしか自生していないし、建材用として戦後の日本を支えてきた木でもある。花粉は困るが杉の木は嫌いじゃないという人は多いかもしれない。下旬に複雑な気持ちが籠る。大晦日今年も来られた湯の宿に妹夫婦と乾杯をする 齊藤トミ子☆

家で手作りを楽しむのもよいが日常で離れて年越しを祝うのも嬉しい。元気で「今年も来られた」ことが何よりの喜びだったのではないだろうか。

我が家の並び八軒は南北を丸丸用水に挟まれて建つ 林 美智子☆

多摩川の水を川崎市まで送っている丸丸用水は農業用だけでなく美しい景観

になり大切な存在になっているようだ。その様子が詠まれた連作の中の一。首。ちよつと誇らしげで作者にも大切な存在になっているようだ。

両親の齢を越えて生きる我肩や手足に故障のいでて 本郷歌子☆

確かに平均年齢は大幅に上がったけれど加齢による体力の衰えは辛いものがある。戸惑うこともあるが少しづつ自分の体調と居り合いをつけて暮らすことが必要になってきたのだろう。

この空をミサイルの飛ぶ日は来るか鴉は今日も山へと帰る 須藤紀子

多くの人が心のどこかに持っている不安であろう。現在の平和が続くように願うが下旬の切替えが印象的。

ひと月を住みにし米沢半世紀経て来たる今日なにもわからず 鈴木計子

ひと月でも住んだことのある地は懐かしいと思うが半世紀という時が思い出さ消してしまった。落胆が結句に籠る。

雨降らず干し上がる川に捨てられた自転車一台姿を晒す 川上美智子☆

川が干上がったしまう程の早魃に私などはびっくりするが近年の異常気象の一つといえるかもしれない。作者は水の底から自転車が見れてびっくりされたようだ。この自転車は捨てられたものかどうかははっきりしない感じもあるので客観的に自転車の色、形、様子などの特徴を入れてみた方が読者の想像も膨らんでくように思われるがどうだろうか。

妹は冥き中有を立ちいでてちははの手へ今日抱かれむ 小林貞子

妹さんが亡くなって四十九日、遺された者には辛い時である。今頃は迎えにきた父母と会えているのではないだろうかという願いを籠めた想像が悲しみを少し和らげてくれるようだ。ご両親の手に抱かれていたいことを信じてたい。

腸の中映すカメラにポリープを摘み切り取る音パチンと響く 高橋燿子☆

カメラで腸や胃などの内部を見ることができるようになり、ポリープ等も切除出来るようになった。冷静さに拍手を送りたい。結句の響きがよい。

勝利と勝子がクラスに二三人居りき昭和十九年生れの吾等 小林芳枝

第二次世界大戦と呼ばれた。まだ日本は勝っていると勝つと国民が信じさせられていた年ですね。敗戦となった六年後生まれの同級生にも勝利君は居りました。勝の字を当てた男子は何人か女子は勝美さんが一人、そんなことを思い出す。

この橋を渡れば友の家は直ぐ洗濯物はためている 松中賀代☆

散歩の途中だろうか。友の家は橋を渡れば直ぐなのだ。洗濯物は友の息災の印と引き返されたのか、それとも友と一緒に出迎えてくれたのだろうか。

彼方なる若草山の山焼きを自宅より見き身重の妻と 松本英夫

彼方なる この一句目で遠目に見た山焼と若い身重の妻と暮らした昔に戻る。しりとりにトランププーチンつながりて世界ますます暗くなりさう 佐藤靖子

しりとりでつながった強国の大統領。「世界ますます暗くなりさう」と作者の思いをはっきりと述べた歌。あるいは多くの人の代弁をされたか。

常ならばすぐに目指してゆくベンチひとの影あり回り道せり 齋鹿ミヤコ

いつもの散歩コースだろうか。楽しみにしているベンチでの一休みは今日は先客があり遠慮の回り道でしょうか。

月一回十八日は写経の日始めたるは七路なりて 西村邦子

始められて何年になるのだろう。まず墨を擦り心を落ち着かせて一文字一文字を丁寧になぞる。どれだけの枚数を重ねて来られたのだろうか。

雨降らず干し上がる川に捨てられた自転車一台姿を晒す 川上美智子☆

年末から雨の降らない日々が続き、ダム湖などの干上がった日本各地のニュースに、元米づくり農家の筆者は縮み上がりました。普段は自転車に浸かる程の水深の川にその姿を晒した。

木の洞へ住まふ栗鼠らし枝揺れて瞬き

小林貞子

の間に小き影消ゆ  
雪原を木の実探して走りたる栗鼠よ春  
だよ根回り空くよ 小林貞子

日本リスだろうか。スマホで調べてみると筆者の住む備後地方では絶滅危惧種とあった。昨春秋、横須賀美術館近くの市街地の道路に車の前をいきなり横切つて行く初めて見る栗鼠に興奮してしまつた。作者の巡りに住むこの愛らしきものへの眼差しが素敵だ。雪が解けて洞から出た木の回りには木の実がまだ落ち残っているのだろうか。

灯のごとく小さきもの胸にただひたすらに退院を待つ 本間志津子

少しと想った入院生活も家の事など考えると辛いものだ。ただひたすらに退院を待つ「灯のごとく」胸に沁みる歌です。

点滴の落ちゆく様を見つめおり動くものなし白い空間 高橋燿子☆

壁もカーテンも白。そこにひとり点滴の落ちる様子をただ見つめている。何もない病室の描写 無心のようなひとと

# 七月集

岩村友康 長崎

紫陽花の花枝のあまた伸びみると庭で喜ぶ妻のこゑ聞く  
挿し木して妻はあぢさゐ育てをり園芸用の改良品種を  
あぢさゐの片仮名書きの新品種われはすぐには名を覚えざり  
目交の雑木なだりに風とほり光あかるく夏さりにけり  
梢には強き香りの花穂咲く椎の木下を歩みゆくなり  
椎の花を受粉なさしむ虫飛ぶか羽音聞こゆる森の辺の道  
やはらかき櫟若葉の萌えわたる並木通りは光まぶしき  
移り来て久しき町の通りにはけやき若葉に五月風吹く  
丘の上に遠く眺むる湾口の天草灘にかすみたなびく

藤田英輔☆高知

十六歳六ヶ月過ぐる飼犬は眠る時間の多くなる日々  
後脚の踏ん張り効かぬ飼犬は横に後ろに転がりて鳴く  
心臓の葉に加え腎臓の葉も増える犬のポールに  
三歳児は小さき毛布を飼犬に掛けつつ名を呼び「だいじょうぶ」と言う

「イヤ」と言う言葉の増えた三歳児吾も大声で言ってみようか

苗床の稲の育ちはもう少し満員電車のような苗たち

田は水を張られて朝陽を跳ね返し苗を待つ日々今日か明日かと

津田美知子 岩手

「震度四」連呼する携帯「津波です」離れ住む子等は安否問ひくる  
三陸に度々起こる大地震慣れる事無く恐れをののく  
何ゆゑに地震津波に山火事と三陸のみを傷み付けるや  
二十一時ヘリコプターの飛び行くは今日の消火を終へての帰りか  
震災に家屋流れし跡地には十五年過ぎても黄水仙咲く  
一組の親子のごとき鯉のぼり子供の鯉の絡みて泳ぐ  
傍らにあなたが何時もあるだけで私の心は満たされてゐる

藤田夏見☆広島

定年後の従兄の新居に移されし母方先祖のおさまる仏壇  
墓じまい済ませて十年従兄の骨寺に連れゆく姉と二人で  
筍の穂先黒ぐる皮を脱ぎひかり伸びたり青き節ぶし  
背丈越す筍へし折り少年ははにかみ浮かべ息を整う  
兄弟の競いて見つける筍を次つぎ掘りたり籠いっばいに  
まな板に羽釜の蓋は早替り少年の捌く筍の皮  
庭につく竈門に羽釜孫たちは掘りきたる筍土産にと炊く

松崎 みき子 岩手

うぐひすの声の聞えず気になりて畑作業も寂しくなりぬ  
春がすみ空か海かの境なく柔く横切る大型客船

大漁旗揺るる漁村の五年祭漁師の肩に神輿乗せられ  
勇ましく太鼓を叩く若者ら初夏の日本海に漁船出でゆく  
物価高ゴミ袋まで値上がりす買物減らしゴミも減らさむ

小網代の森散策

山本 述子 神奈川

山藤は緑に溶けて色冴えてそよ吹く風に靡きをりたり  
鶯の澄みたる声す人里に聞くよりはるかに高らかにして  
黒揚羽空澄みたる森の中思ひ切りよき飛行を披露す  
柏餅を端午の節句に食みをれば母の手作りやはり懐かし  
連休が命日なれば墓参りレジャー気分申し訳なく  
掘りたての竹の子届き早速に露と合はせて夕餉の卓に

金子 八重子☆ 千葉

身動きのできぬを耐えてラッシュ時の降車駅来て前席の空く  
胃袋は十割そばを推してくるランチに迷うラーメン横丁  
聞き惚れる程でもなくて孫の歌盛り上がるには良い歌唱力  
砂を抜く浅蜷にかぶせた蓋取れば呑気にビローンと管の出しており  
一文で済ませば良いのに同僚は短く三度もラインを寄こす

爆睡のツボ押し試せば既に朝気絶したかのごとく眠りき

カーテンを酷暑に備えて吟味せり遮光遮熱にUVカット

井上 鈴子 山形

ほんのりと桜の蕾紅くなり夫と散歩す国道113号

紫木蓮と白木蓮の並木道この花見つつ友は訪ね来

居酒屋に海の肴を姉と食む話は尽きず義兄と兄の

仙台のシテイホテルの狭き風呂に二人で入る子供の頃のやうに

赤きポーチと久慈の琥珀の透き通るペンダントくるる姉は形見と

つぼみより二週間経ち花弁が散りくる散歩の桜のコース

筒形の先に緑の模様つけ雪のひとひらとふスノーフレイク咲く

井出 裕子 静岡

堤防の脇の空地に花植ゑて水遣り日課に義姉は愉しむ

花々を人が足止め愛でゆくを見るも愉しと義姉はほほゑむ

水遣りを終へて堤防のごみ拾ひするもついでとパワフルな義姉

義姉はけふ夫と花屋に夏の苗求めに行くとメールを寄越す

ツインタワーの跡地に立ちて見上ぐれば二つの飛行機音なく過ぎ行く

ツインタワー跡地のプレートに足止まる犠牲者名の中に日本人ありて

母の内で犠牲となりし unborn child プレートの文字に涙湧き来る

雨あがり小さき虹の架かりをりツインタワーの跡地の池に

(☆印は新仮名遣い希望者です)

秋の日は黄に実りゆく伊木力の山ながめつつ農作なせり  
 岩村知康  
 長崎県の伊木力地区は蜜柑の産地。山全体に蜜柑の黄色が輝いているのだから。実りゆく自然の恵みを感じながら、自らも農作業に励んでいる。ゆったりと広がる秋の情景。

飯を炊き味噌汁を煮て湯灌もす喪主を支える組み内ありき  
 藤田夏見☆  
 地域コミュニティの衰退が叫ばれて久しい。このような相互扶助組織も消えつつあるのだろう。葬儀に関わる事情も大きく変化している。変わっていく世の中にあれば、これも流れか。

案の定セールの棚にうつされる菜の花  
 買ひて器に活ける  
 東 ミチ  
 次第に花が開き、セールの棚に移される菜の花。食用としては価値が下がるが、花はかわいい。器に活けて生活を楽しんでる様子がいい。

五月号 十首選  
 冬雷集 須藤 紀子  
 手作りの陶器に描きし新婚の思ひ思ひの言葉の可笑し  
 櫻井 一江  
 人生の喜怒哀楽を「他愛なき」ことと思へる歳となりしか  
 山口 嵩  
 砕けよとその身投げだす若き僧五体投地のその凄まじさ  
 天野 克彦  
 白梅に遅れて盛る紅梅の参道をぬけて受験の親子  
 高松美智子☆  
 割れるとき放射状にしぶき放ちしやぼん玉消ゆ虹を残して  
 高橋 説子  
 角曲がり見えなくなるまで見送りぬ友の姿の老いて小さし  
 大塚 亮子  
 目に見えぬ梅の花粉の飛び居らむ離るる折に香の際立てり  
 嶋田 正之  
 もういいと言いつわが手を離れ行く君のその手を追いたい今日は  
 江波戸愛子☆  
 壁紙にそのまま残るつめとき跡懐かしけれど張り替へを決む  
 鈴木やよい  
 母よ母よ焼く野の雉子のごと呼べば母の声を胸の奥どに  
 姉川素枝子

子等が待つ家庭の主婦に变身す五時半からの看護師仲間  
 加藤富子☆  
 責任を伴う大変な仕事をしている看護師さんたち。一日の仕事を終え、五時半からはお母さんに变身する人もいる。仕事も家庭も目一杯こなす若いパワーだ。窓あけて「冬の星座」を口遊む凍て付く空にオリオンのなし  
 奥山清子  
 夜空を見上げて「冬の星座」を口ずさむ。それだけで凍て付く空と、瞬く星がイメージされる。しかし歌詞にあるオリオンは見えない。静けさが増すようだ。のしのと雪降る午後息子より届く  
 宅配潮の香ほのか  
 同  
 雪国に住む人の感覚的な表現なのだろうか。「のしのと」が印象に残る。雪が降りしきる心細い午後に、息子さんから荷物が届いた。ほのかな潮の香と息子の優しさも一緒に。  
 暖かい甘栗いただき思い出す小布施の茶店や街並などを  
 安川敏子☆  
 あたたかい甘栗にふつと浮かんできた小布施の記憶。小布施は栗で有名な地。

五月集 中村 哲也  
 早春の野畑になす畦の木の伐採さらにかづらの根掘り  
 岩村 知康  
 飯を炊き味噌汁を煮て湯灌もす喪主を支える組み内ありき  
 藤田 夏見☆  
 組み内に今年五件の回覧板「家族葬にて」皆みな親しき  
 藤田 夏見☆  
 例のなき豪雪の冬さりゆけば被害現はる軒にも庭にも  
 東 ミチ  
 子等が待つ家庭の主婦に变身す五時半からの看護師仲間  
 加藤 富子☆  
 助手席に笑顔の遺影鎮座させ「気をつけます」と今日のはじまる  
 奥山 清子  
 暖かい甘栗いただき思い出す小布施の茶店や街並などを  
 安川 敏子☆  
 磯浜で採れたる岩海苔珍しく佃煮にして香りごと食む  
 松崎みき子  
 デビュー時の坂本花織孫に似て最後の滑りを動画に残す  
 高藤 朱美☆  
 繰り返し眼より耳より入り来たる戦争用語いっしら寛ゆ  
 梶尾 栄子

おいしい栗菓子や落ち着いた街並みを懐かしく思い出したのだろう。  
 磯浜で採れたる岩海苔珍しく佃煮にして香りごと食む  
 松崎みき子  
 採ってきたばかりの天然の岩海苔を佃煮にできるとは、なんとも贅沢なことだ。口に運べば豊かな磯の香りが広がるに違いない。「香りごと食む」の表現が生きている。  
 デビュー時の坂本花織孫に似て最後の滑りを動画に残す  
 高藤朱美☆  
 お孫さんに似ているからと、デビューの頃から応援してきたようだ。まるで、お孫さんが一人増えたかのように。最後の滑りは寂しかったかも知れないが、ありがとうの気持ちも。  
 未だ草の勢はぬうちにと指先の冷たさ堪へ小ささを引きをり  
 梶尾栄子  
 まだ寒さは残るが春は近づいている。所々に小さな緑が見え始めた。冬枯れの後の緑は嬉しくもあるが、すぐに大きくなって手に負えなくなる。筆者はいつも草取りに出遅れる。

島木赤彦研究会入会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。
- そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。投稿などの機会が得られます。

●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局  
 江戸川大学 中島金太郎研究室内  
 〒270-0198  
 千葉県流山市駒木四七四  
 ☎ 〇四(七二五二)〇六六一(代表)

## 五月号 作品二評

井上  
菅子

春浅き今朝の冷え込みダウンコートの人あり薄きコートの人あり 松居光子  
冬から春へ、季節の変わり目をコートの違いで捉えた。ダウンコート、薄きコートの具体が、行きつ戻りつの寒さを表して、観察の目が行き届いている。

数回の休息入る急坂にひときは高き  
鶯の声 益坂順子

登山の一こまだろう。急坂では鶯の声も耳に入らなかったかもしれない。休息の時に聞こえた鶯の声は、美しく新鮮に響いた臨場感がある。

温む日に数増し咲きたる寒あやめ背く  
らべして庭の明るむ 児玉孝子☆

寒あやめを調べると、一月から三月に咲くとあった。温み日に背くらべして、植物にも意志があるようで微笑ましい。春の兆しが明るく詠まれた。

東海道新幹線終点東京駅近づけば飲み  
掛けの茶飲み干す吾れも 佐藤幸子

終点の駅が近づき降りる準備として、「飲み掛けの茶飲み干す」は、緊張感とともにうまく捉えられた。

紅梅につがいのメジロシジュウカラ鶇  
飛び来てわれ退散す 立石節子☆

メジロもシジュウカラも美しい鳥。それが紅梅に止まっている光景は一幅の絵である。鶇も混じった句紅梅を鳥たちに譲った平和な風景と作者の優しさがあ

る。  
脳トレとピアノに向かう昼さがりはじめ  
に弾くはいつも「故郷」 小嶋知葉☆

脳トレにピアノを弾くというおしゃれな暮し。いつも「故郷」を弾くのは、心にもいつも故郷があるからだろう。故郷への思いを言外に詠んで深みがある。

早朝の常とは違ふ静寂は出漁出来ぬ濃  
き霧のゆゑ 津田美知子

漁船は早朝に賑々しく出発する。霧で出漁できない静かさに気付くのは、港近くに住む生活者の感覚の冴えである。春らしき朝の空は晴れたれど地上に続く戦争憂ふ 野口秀子

## 五月号 作品二評

江波戸  
愛子

軽軽とバートナーを持ち上ぐるファイ  
ギユアスケートペアの支へ合ひ 松居光子

ミラノ・コルティナ冬季オリンピックで金メダルを獲得したふたりを讃える歌であり、その演技を観ていた感動が伝わります。

「おばあちゃんとの山登り忘れないよ」  
孫の筆跡宴の席の 益坂順子

お孫さんの結婚式に出席された席に置かれていたお孫さんからの思い、読んだ作者の驚きと嬉しそうな姿が浮かび大変だったけれどたのしい山登りだったことがよくわかります。

四方囲む山より朝日今昇る昼神温泉の  
残雪の朝 児玉孝子☆

日本一の星空を観ることができて美肌の湯など有名な温泉に浸かり、のぼる朝日に輝きをまじくる雪の残る山やま。誘ってくれた娘さんへの感謝と共に楽し

明るく穏やかな春の空。だれもが嬉しくなるようなこんな日も戦禍に喘ぐ外つ

国に思いを馳せ、世情をやりわりと詠む。降り止まぬ雪をまといて紅梅の微かに

香り雪に埋もれる 塚本節子☆

早春の思いがけない雪に、紅梅も作者も驚いている。雪の白紅梅の紅、そして香りもあり、彩りの美しい情景を捉えた。採れたての青菜を買いひとしきり調理談義する直売店で 首藤文江☆

直売店の店前が目に浮かぶような歌。新鮮な野菜を手に、売る方も買う方も、いきいきとした姿が楽しそうに伝わる。

手袋の中にかじかむ指先をグーパーし  
つつ信号を待つ 金子八重子☆

かじかむ指先の血行を促すための「グーパーしつつ」、この小さな所作に着目し、歌の大きな力になっている。

遠き日の駅の近くの地下道の傷痍軍人のアコーディオンの音 山崎 猛☆  
今は死語となった「傷痍軍人」。白い服を着て松葉杖をついた姿が目につかぶ。ここには忘れてならない歴史がある。

むことのできた喜びがよくわかる。

キンカンの高枝伐らず今朝見れば黄色  
くなつてそよ風ゆらす 早乙女イチ☆  
作者が金柑の木を楽しみながら大切に育てているのが下の句によく判る。

小六のとき校舎に機銃掃射うけにきあ  
の日の怖さ今に忘れず 水澤タカ子  
機銃掃射は機銃で敵を薙ぎ払うように射撃をすることある。小学生の時にうけた怖さはときにフラッシュバックするのかもしれない戦争の体験を話すことの大切さをあらためて思った。

川越へ月に一度のたのしみは新たな発  
見ある友の歌 立石節子☆

冬雷の歌会が川越で開催された先月は多くの会員が参加をされた。その歌会で新たな発見があったと詠んで月一度の歌会を楽しみにしている姿勢が素晴らしい。

静かなれどシーンシーンと聞こえる  
人の体の不思議を思ふ 津田美知子

静かな場所でシーンと聞こえるのは血液の流れる音や内耳で発生する微弱な音を脳が拾ってしまう為らしい調べて学ば

せて頂きました。

雪降ろしの前と後との写メールで雪の  
多さを姉に知らせる 井上鈴子

今年は雪の量がいつもより多かったの  
でしょうか、その雪の量を携帯電話に撮って送ることのできる便利さを詠む。

漸く入院書類書き終えて明日の晴れ  
をただ願ひおり 塚本節子☆

ご主人が入院となる時にはいろいろな手続きが必要になり漸く書き終えた入院日の前日、明日の天気を晴れにと願う、ご主人への思いがよく判る。

足の痛み桜咲く頃治ればと願いを込め  
て膝下摩る 首藤文江☆

桜の花をご自身の足で見に行きたいと願う気持ちがつよく伝わる。願いがかない桜の花を楽しめたのだろうか。

初めての倍満アガリに嬉々としてどっ  
ぶりはまった健康麻雀 金子八重子☆

高齢者の健康麻雀参加者の数が増えて  
いる。町会会館の使用予約一年分の申し込みもあり、脳の働きも良くなるような気がする。倍満アガリの喜びに溢れた歌。

# 作品二

小林 芳枝 東京

晴天の五月五日午前五時出発す此度は田村市滝根町まで  
ビンゴゲームの数字を引きて読み上ぐる年長の孫はマイクを持ちて  
十一人にて行く今年の家族旅行最年長となりてさびしも  
それとなく誰かに見られるやうな車降りるとき坂登るとき  
母の歳に近くなりつつ新しく知ることありぬ吾が身の内に  
山中の水田は杉を映しつつ早苗のほそき葉を浮かべをり  
夏の間エアコン不要と聞きながら天井高き部屋肌寒し  
くねる道登りて来たる山なかに「入水鍾乳洞入口」の文字  
岩と岩の狭き間を潜りしと半身水に濡れながら言ふ

松居 光子 三重

ひとつづつバーコード確とスキャンしてディスプレイを認むセルフレジスター  
指示通りタッチパネルを指で押しカード払ひで会計済ます  
行列のレジに並ぶ負担減りセルフレジの身近となりぬ  
ふはふはの真綿に包まる蚕豆は鞘を剥かれて眠りより覚む

さみどりの蚕豆にエビとイカ加へかき揚げにする初夏の夕餉に  
連休はそれぞれ予定のあるらむか孫達からの連絡もなく

東 ミチ 青森

朴の木も紫式部も豪雪に折れて小さき芽を出してをり  
腰と手の調子うかがひ庭仕事近所は我れを元氣と褒める  
夕暮れて鳴きつつ帰りゆく鴉心穏しく眺め見送る  
吾の家の回りに鴉多くなり幾日も騒ぎぬて気味悪し  
ノラ猫のよく来る庭の軒下に餌皿を置くどの子もどうぞ

佐藤 幸子 山形

コロナ来襲日は連翹の花眩しくてあれから六度の春を数ふる  
満開の姫こぶし仰ぐ一服は畑の端の水仙の土手  
五本指靴下揃へて干せば親指の先にぼつんと穴の開きをり  
枯草のなかに顔出す青こごみ「ほらその足元」と夫の指さす  
繰り返し「荒城の月」歌ひつつ病みある夫に寄り添ふ友は  
山の辺の轍の道をゆるらかに行けば父母の里を思ほゆ  
知り尽くしたる里にもしらす小径ありて隠れ蕎麦屋の引き戸を開ける  
断捨離予定の狸と狐の剥製と眼合ひたり納屋の片隅

兎玉 孝子 ☆ 愛知

わが畑にアイリスの花咲き始め知人と喜び分かち合いたり

ポケ防止に編んだと仲間のくれし帽子身につけてみる友の温もり  
珍しく生姜をつくるを思い立ち僅かばかりを畑に植えたり  
お盆には来るねと言って孫帰る優しき言葉に角まで見送る  
例年を主になり畑仕事なしたれど向かう暑さに自信の持てず  
わが身にて畑の管理できがたく息子に耕作出来ぬと話す  
長男に勤め乍らの耕作は出来ぬと言われ同意をしたり  
日常に吾れの仕事の少なくとも楽しむゆとり持ちて生きたし

卯嶋 貴 子☆ 東京

階段を上る途中でボキッと音がして左の足が動かなくなる  
救急車朝一番に電話して四人の隊員に抱えられて入院す  
担当医は朝と夕方来て経過を話し部屋を出でゆく  
朝昼晩毎日変わる看護師は十日の入院で顔もおぼえられず  
リハビリをしてくれる理学療法士は孫のような若い男性ばかり

立石 節 子☆ 東京

新年度大ホテルでの祝賀会先の不安も見えつ隠れつ  
裏庭で孫らの楽しむ庭作り雑草抜きて飾り石置く  
何故なのかいっ頃からか判らねど草抜くときに鼻水涙  
手入れせず草茫々の庭なれど緑の多く暑さ遮る  
姪っ子は三人の子を育てつつ明るい笑顔人に頼らず

受付をして覚えたる人の名もすぐに忘れて暫し佇む

十五日締め切りの物四件あり最後に送る冬雷の歌

羽田 孝輝 山形

子や孫が大変だからと墓仕舞ふ受け継ぎしものみな捨てる今  
先人が受け繁ぎしものみな捨てる代が変はりて縁も消え行く  
生きる為熊は街に出て駆除さるる贅の為人は山に立ち入る  
穏やかに雨降る朝に従兄逝く家族の看取る中静かに逝けり  
従兄逝く雨降る朝に呆気なくただ呆気なくただ呆気なく  
この時世家で死ぬるは幸せか雨降る朝に静かに逝けり  
鉛筆と箸持つ時は右の手で持ちて欲しいと客を眺むる  
俺は持つお前が持つのは許さんと戦争始むる指導者のあり  
太陽光パネルはいづれ毒を吐くメディア一切何も伝へず

早乙女 イ 子☆ 栃木

ミカンの木の青葉の中に白い花たくさん咲いて朝日にゆれる  
今年またミカン生るかと思いつつ毎朝見つつ爽やかになる

安川 敏 子☆ 埼玉

大輪のバラが竹垣抜けて咲き道行く人等を笑顔にさせる  
増水の川をのんびり泳ぐ鯉空にはゆらめく三色の鯉  
待ちかねたトマトの直売買に行くスーパーにないホンモノの味

新築の家にシャッター多くなり戸袋なくて住宅難の小鳥たち  
戸袋を小鳥にとられ枯れ枝やワラを掻き出す汗流しつ  
何だろう昨日冷房今日ストーブ日向は五月日陰は三月  
連休は蔵の通りに人あふれ脇道選べば車の渋滞  
冬雷にお誘いした方九十五歳になりて購読会員つづく

奥山清子 山形

今朝摘みて紫流しのガラス器に挿して供へたり花大根の花  
庭の辺の去年の黒き実そのままに白やまぶきの楚楚と咲き初む  
白藤の尺余の花房棚に垂る手入れよろしき友の庭辺に  
断捨離といふ語を嫌ひ古き本開きて読めば文字の小さき  
夫求め間もなく逝きし『運命の人』形見と思ひながら読み込む  
読み終へた山崎豊子の全四巻ひと月かけて『運命の人』  
小旗立てし昔の天皇誕生日茸飯供へる結婚記念日(四月二十九日)

水澤 水 澤 タカ子 山形

真向かひに遠く輝く月山を仰ぎつつ往く西川間沢へ  
スマホにもアップされたる雛祭り歌友と共に玉貴へ観に行く  
北前船に運ばれて来し享保雛人より大きく驚くばかり  
膳の上に襖祓の紙置かれ月山修験の信仰伝はる  
緑映ゆる寒河江川辺の岸によりひしとつかまる河鳥一羽

杖つきて寒河江公園をひと巡り木の椅子に掛け大息つきぬ  
篤農家S氏の春菜あまく濃く世の憂きことを忘るるごとし

野口秀子 山形

咲き揃ふ桜並木のドイツ館曆に見れば心華やぐ  
帰り際に玄関に匂ふ香りあり西方に咲き出す藤の花たち  
草刈を終へたる裏のやぶ畑は幾何学的にいと慎ましき  
山形の二十四階のビルの窓より故郷を観る舞鶴山を  
庭石の脇に咲き初める紫の立浪草沢山目に付き柔し

加藤 富子 ☆ 栃木

水曜日は弁当番ばあばの日笑顔で見送る幸せ時間  
「俺のはどっち」一二つ並んだ弁当を弟が先に取り自転車が出る  
半額の種を求めて挑戦す発芽見守るジニアとかすみ草  
四月より夏日を示す日のありてエアコン発注す真夏に備えて  
三ヶ月ぶりの歌友との勉強会話題はあれどつまりは健康  
八十路すぎて婿の希望の蕎麦を打つ友の意欲は私の目標  
妹の誘いがありて東京へ四十年ぶりの清澄庭園  
入場料は七十円にて老いには嬉し石の宝庫の清澄庭園

高藤 朱美 ☆ 茨城

爪ほどの木の芽たたいて若竹煮わらびタラの芽春は姉から

山形の桜の前でオカリナを奏でるワルヨ神父の動画  
ケマンソウのハートの形に魅せられて今年はひとつ花咲かせたり  
春浅きうす緑色のつくば道友待つ街のゆりの樹元氣  
足場組みシートに包まれ我が家は十三年目の化粧中なり  
ペンキ臭苦手で家を飛び出してパスタのランチひとり味わう  
中東のもめごと我が家に繋がりに思いもよらぬペンキの不足  
水鳥の姿見えずに亀泳ぐ藤も見納め一人散歩す

塚 本 節 子 ☆ 茨城

四十年ぶりに訪う大洗鷗松亭潮の香まとう新しき宿に  
夏休み子等と泊まりし鷗松亭プールの景の懐かしきかな  
老い二人並びて見入る水族館キアンコウの産卵の映像に  
キアンコウは一分間に八メートルのゼラチン状の卵を産めり  
コロナ禍にロンドン赴任せし息子夫の手術と重なりし日に  
一時帰国の息子の抱え来しハロウズのクリスマスベアは五個になりたり  
ロンドン勤務終えたる息子を玄関の記念の熊らはにっこり待てり  
日本語と笑顔の飛び交う空港に安堵したりと息子は言えり

小 嶋 知 葉 ☆ 茨城

コーラスの懇親会は年一度二時間半のトークが弾む  
名ばかりの団長であるわれなれど指導者への思い熱く伝える

良き仲間良き指導者に恵まれて老いても楽しコーラストタイム  
リズム感弱いと思うわれなれど良くぞ続きぬ二十年間  
みかんの木つぼみびつしり咲く花も揺れているなり強風の中  
七年の「努力」「信頼」語りたるりくりゅうの二人笑顔さわやか  
勝ち進む世界卓球わくわくと解説者のことば温かく聞く

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

久しぶりに体組成計買い替えて緊張して見る体内脂肪  
新しい休日倶楽部の手帳見て春はどこへと思いを馳せる  
人気なく物淋しげな角の家雑草の庭に錆びたブランコ  
疲れたと言って見上げれば鯉のぼり旅の疲れを癒やすように  
次々と咲く花々に追いつけず見る間失い来年こそと

山 崎 猛 ☆ 埼玉

赤門を出でたる友と飲む酒の午年七回過ぎてなお酔う  
スマートフォン的心なき音に目覚めれば今日の予定の多くあるなり  
うつつらと明け行く窓の向こうにはオリーブの葉の静かにゆれる  
突然に動き出したる掃除機はベッドの下で暫し鳴きおり  
音やみて掃除終えたる掃除機は充電台へ静かに戻る  
中東の石油の騒ぎゴミ袋さへ手に入らぬと人の言うなり  
愛しけれど使わぬ品を処分して心新たに仕事に向かう

作品一

石渡 静夫

作品二

大塚 亮子

作品三

天野 克彦

春うらら見上げた空にオスブレイドこへ何し  
 にと問いたくなりぬ 永光 徳子☆  
 雪の朝ゆきを被りたる紅梅の花あかあかと輝  
 きを増す 正田フミエ☆  
 幼き日嫌いでありし「しもつかれ」今好物で  
 時どき作る 斉藤トミ子☆  
 赤い実を風にゆらせて小鳥待つヒヨやメジロ  
 は何処に行ったの 松中 賀代☆  
 大木を三本切りて風の音やさしくなりぬ北風  
 の日 本郷 歌子☆  
 娘と孫つるる上野の動物園にて本物のパンダ  
 背を見しままに 大塚 照美  
 大地震後いえ再建に八十八の父はコレクショ  
 ンの絵を処分したりき 三好 規子  
 ひと月を住みにし米沢半世紀経て来たる今日  
 なにもわからず 鈴木 計子  
 須磨の浜首を討たれし若武者の敦盛首塚小  
 な社に 西村 邦子  
 入国のゲート通過しあちこちより日本語聞こ  
 えるただいま東京 永野 雅子☆

結婚式の招待受ける喜びに苦痛の混ざる齡重  
 ねて 益坂 順子  
 玉露飴小袋八ッ橋売る店が落葉払ひぬ醍醐寺  
 の庭に 佐藤 幸子  
 親鸞様の銅像わきの蠟梅のあはき黄の花ほつ  
 ほつ咲けり 水澤タカ子  
 川越へ月に一度のたのしみは新たな発見ある  
 友の歌 立石 節子☆  
 「二日に一度は笑ふ」と決めてある有言実行  
 の夫と私 津田美知子  
 雪下ろしの前と後との写メールで雪の多さを  
 姉に知らせる 井上 鈴子  
 採れたての青菜を買いてひとしきり調理談義  
 する直売店で 首藤 文江☆  
 人生の最後の大きな旅と決め美術館巡りのア  
 メリカに行く 井出 裕子  
 手袋の中にかじかむ指先をグーパーしつづ信  
 号を待つ 金子八重子☆  
 遠き日の駅の近くの地下道の傷痍軍人のア  
 コーデイオンの音 山崎 猛☆

折紙の小箱づくりに熱中すチラシ活用で幾通  
 りもの箱 後藤 恭介☆  
 のらぼう菜ぐんぐん伸びて雨の中花一列の満  
 開を待つ 越澤 太朗☆  
 江戸守る箱根関所復元の改め婆の形相すごし  
 長谷川 剛  
 一部屋で家族が過ごす五日間嘗てなかつた穩  
 やかな日々 長澤千恵子  
 日ようは出入りする子の声響き老いの二人の  
 活力となる 今野 澄子  
 集うのはこれが最後と言いなながら「傘寿の宴」  
 を幼なじみと 松田 忠一☆  
 冬雷の友の名地図に書き入れる西日本にはわ  
 ずか十八人 河原木光子☆  
 台詞ある悪女になりし五年生白雪姫の継母の  
 役 児珠 純子  
 満員の電車で席をゆづられて異国の人の優し  
 さしみる 和田 妙子  
 ぬか漬けのきゅうりさっぱり美味しくて明日  
 は茄子の漬かるのを待つ 今福 崎子☆

五月号 十首選

富田真紀恵氏追悼(冥福をお祈りします)

富田真紀恵さんを偲んで

小林芳枝

歌集『季の約束』表紙  
(2011年・短歌研究社刊)



居なくても居てもかまはぬわがことも長く生きては困る  
人かな 富田真紀恵

九十一歳で一月三十日に亡くなられた富田さんは私より十  
 歳年上、冬雷に入会されたのは昭和五十七年十月。作品は  
 五十八年一月号から載っている。私が四十四歳の頃なので思  
 い返してみると住宅ローンの返済とか小学生二人の子を育て  
 ることで精一杯であった。冬雷誌に初めて載った富田さんの  
 作品は完成度の高いしっかりした歌で素晴らしい。その時の五  
 首を読みながら富田さんを偲びたい。

西空の茜の消えて白菊も黄菊の花も暮れてゆくなり

遠くの夕日から近くの菊の花へと視点を移しながら一日の  
 終りを静かに見つめている。どんな一日だったのだろうか、  
 どことなく寂しさが漂う。

窓越に秋の光を見てみしが触れてみたきと出でて来りぬ

この歌を読んだ時、過不足なき人間の本音を吐露された、  
 この歌びとの死生観に圧倒され、お目にかかりたい、と思つ  
 た記憶がある。そして九十歳を迎へた現在の私の境地でもあ  
 る。言葉の一つひとつが淡々として納得させられ、通り一遍  
 の感情ではなく、どんと構へて動じない穏やかさは、もはや  
 お見事といふほかないのである。「お母さんを頼むよ」と長  
 男に言ひ残したといふ亡夫の許へ、遠からず、私にも、その  
 日が来る。転倒して三年、不自由な躰になり、まさに、その  
 途上の私である。改めて、故人のご冥福をお祈り申し上げます。  
 合掌。

〈大塚照美〉

家の中から見ている日の光りに飽き足らず直に触れてみた  
 いという思いと直ぐに出て行って体験する行動力に惹かれ

る。

夜毎に位置高くなり明あかとかたち満ちくる窓に見る月

月の位置と満ち欠けする形の僅かな違いを見つめながら窓の中でどんなことを思っていたのだろうか、一日の終りに空を見上げて心の整理などされていたのかもしれない。

黄の色に咲きたる菊は中心にまだほぐれざる花びら抱けり

菊の花の咲く様子に焦点をあててしっかりと写実の力を感ぜさせる。結句「抱けり」が何とも温かい。

朝露の流れ始めて少しづつ空も屋並もおぼろに見え来

夜明けの庭に出たところだろうか。しっとりとして明けてゆく風景が感覚的に詠まれている。

富田さんがまだご自宅に居られた頃に何度か電話で話したことがあった。大きな家にお一人で居られたような感じだった。もうすぐ移るといふ話も伺ったが施設で暮らすようになったら歌は最後まで途切れずに送って下さった。大会にも参加して頂いて、高点だった時は私も嬉しかった。施設の皆様が大切に下さっているのだらうと想像しながら月々の

歌を読ませて戴いたことが私の励みになっている。

合掌

歌集から富田眞紀恵さんを偲ぶ

桜井美保子

美しく豊かな抒情歌を詠んでこられた富田さんの作品に、もう出会えなくなったことは寂しい限りである。富田さんにお会いしたことはないのだが平成二十三年二月（二〇一一）刊行の第一歌集『季の約束』をいただいている。また同じ年に刊行の冬雷五十周年記念アンソロジー『冬の雷霆』に参加しておられたので、まず両方の歌集の頁をひらいてみた。

『季の約束』のあとがきには短歌との出会いは高校生の頃だったこと、嫁いだ家が铸造業をしていたので事務を手伝ったりしているうちに短歌から遠ざかったこと、昭和五十六年に会社も解散、子供が成長したのを機に地元富山の「短歌時代」社で短歌を学び、その後友人に誘われて冬雷に入会したことなどが書かれている。そしてその友人が亡くなり、休職してしまつた富田さんを励まし、復帰して下さいと声をかけてくださったのが大山敏夫先生だったとも記している。富田さんはその頃ご主人が介護を受けるようになったりご自身

丹念に冬の日差しをあつめつつ枇杷の小花はをりをりに照る 同

冬雷の大きな企画であつた『作品年鑑』にも参加されておりそこから一首、さらに今年の冬雷誌より一首をあげてみた。

われに歌あるをしみじみうれしみて施設の部屋に真夜をペンとる 二〇一八『作品年鑑』

父母にだかれて見上げし雪の白思ひださせて今日降る雪は 二〇二六年二月号  
長い間、素晴らしい作品を冬雷に届けてくださりありがとうございます。ご冥福を心よりお祈りします。

追悼文を書かんとしつ 十五年前のことを思う

大山敏夫

雪吊りをはげせば庭に束縛のなき騒めきがたちまち起る 『季の約束』

をりをりに子より電話がかかりくる老いるといふもさう悪くない 同

何をしに来たる厨かたたずみてコップ一杯の冷水を飲む 『冬の雷霆』

富田眞紀恵さんの訃報に接し「永眠」という言葉にしばらく絡め取られていた。小誌五月号掲載の拙作、訃の報せ永眠といふ語がひびき二度三度読み身に沁み渡る

という一首はそんな日常の中で生まれた富田さん追悼の歌。享年九十一歳であり、その死因は「最期は脳出血であつという間」だったと御子息のメールで知った。富田さんの作品に、をりをりに子より電話がかかりくる老いるといふもさう悪くない

子は妻とはや帰りゆく母われをかくれんぼの鬼のごとく残して

などがあるが、その「子」がこの御子息なのかと思つた。

大きな家に高齢の一人暮らしが危うくなり、認知症の症状も少し見え始めた頃より専門施設に入所されたのだが、その対応に骨をおつたのがこの御子息だろう。入所後の富田さんは老化症状がびったりと止まり、ずっと状態継続のまま数年を過ごされたようである。担当職員の方の手助けを得て、毎月その作品はきちんと清書されて届く。時には施設で書かれた絵や、詩なども見せてくださるほどの日常であつた。

御子息も毎月小誌PDF版をホームページで見ても、いち早く母上の状況をチェックしていらしたようである。その最後の作品掲載となつた小誌二月号の二首、

父母にだかれて見上げし雪の白思ひださせて今日降る雪は

幼き日父にだかれて見上げたる雪の白さを思ふ吾かなについて、「最近の冬雷への投稿では幼い頃のこと、両親のことばかりでしたね。」という感想も寄せられている。

## 第44回子規顕彰全国短歌大会

### 応募方法

雑詠2首1組 1,500円  
何組でも可。(自作未発表作品に限る)  
規定の応募用紙は子規記念博物館のホームページからダウンロード(A4版)できます。  
必要事項を楷書で明記し、応募料を添えてご応募ください。郵送の場合は定額小為替か現金書留。直接持参可。

### 作品募集

### 締切

令和8年7月31日(金) 当日消印有効

### 選者

坂井修一 中川佐和子 吉川宏志  
波 克彦 兵頭なぎさ

### 賞と発表

文部科学大臣賞・愛媛県知事賞・松山市長賞・松山市教育長賞  
後援賞 現代歌人協会子規記念賞・日本歌人クラブ賞  
短歌研究社賞・角川『短歌』編集部賞・現代短歌社賞  
選者賞 各選者 特選3首・秀逸5首・入選15首  
表彰式で発表、表彰します。

### 入賞歌集

応募者全員に1冊1冊送付します。(12月末予定)  
令和8年10月25日(日) 午前10時より

### 会場

松山市立子規記念博物館 4階講堂

### 記念講演

講師 中川佐和子氏 (未来) 選者  
演題 「子規 左千夫・赤彦・茂吉へ」

### 応募先

〒790-0857 愛媛県松山市道後公園1-30  
子規記念博物館内 子規顕彰全国短歌大会係  
電話 089-931-5566  
ホームページ <https://shiki-museum.com>



主催 松山市教育委員会  
後援 文化庁 愛媛県 現代歌人協会 日本歌人クラブ 松山歌人協会  
短歌研究社 角川『短歌』現代短歌社 朝日新聞社 毎日新聞社  
愛媛新聞社 NKK松山放送局 南海放送 テレビ愛媛 あいテレビ  
愛媛朝日テレビ FM愛媛 愛媛CAV

娘さんの場合にこのような懇ろな例は多く知るが、息子さんがこんなな手厚く対応されるのを初に知った。富田家の親子関係が温かかったことがわかるのである。

われ病みて夫を施設に預けたりひとりはいやだやつぱり寂しい

こんなふうには夫婦のやむを得ない別居生活を悲しんだ歌がある。御子息にしても同様だったのかと思われる。

その歌集『季の約束』の批評特集号は二〇二二年一月号に組まれた。その記事を今読み直しながら思えば複雑である。編集後記には、「短歌新聞」が第698号にて、「短歌現代」が第418号で廃刊だとあつた。ちなみに小誌この号の本文は96ページ、出詠者数一四三名となっている。

批評特集は総数16ページにわたり、執筆者数11名。現在も小誌に名を連ねる人は大塚亮子、兼目久、桜井美保子、小林芳枝、嶋田正之の五名となっている。その中の嶋田氏の文を読んでいると、歌集刊行を見届けられたのちに御主人が逝去されているのであつた。一つの歌集が生まれ残される歴史にはまこと様々なドラマが隠されていると思わせる。

富田真紀恵さんのご逝去を心より悼みご冥福をお祈りするものであります。こうしてわたしなども、冬雷の先輩、仲間、友人らをどれくらい見送って来たことか、通り一遍の表現ながら、走馬灯のように思い浮かべている。

## 【最新刊】 1000 比喩の短歌コレクション



短歌はレトリックの宝庫です。中でも「比喩」は花形で、古今の名歌の多くは「比喩」に満ち溢れています。本書は「比喩」をいかけた短歌1000を選出。比喩の種類別を明示し難解なものには脚注で解説しました。

### 固有名詞の短歌 コレクション1000

日本短歌総研編著 1430円(税込)

### 恋の短歌 コレクション1000

日本短歌総研編著 1430円(税込)

### 形容詞・形容動詞の短歌 コレクション1000

1430円(税込)

### 短歌用語辞典 増補新版

日本短歌総研編著 四六上製箱入536頁 4400円(税込)  
短歌によく使われる用語の説明と著名歌人の作品を多数引用。他に類書のない実作者必携の辞典。見出し語一〇四・引例歌七三四七首

◆創業1948年、詩歌と共に77年！ 伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

〒112-0002 東京都文京区小石川 5-16-4 図書出版 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 FAX 03-3815-3810

## 五月号 作品三評

山本  
三男

今年また各紙を買い元旦号の社説を  
読んで時流を学ぶ

後藤恭介☆

作者の世の中に真摯に向き合おうとする姿勢が伝わってくる作品です。新聞の各紙を買うのは情報が偏らないよう広く時流を知ろうとしているのでしょうか。昨今、新聞の発行部数が減っているということに耳にしますが、新聞の役割はまだあることに気付かされました。

一部屋で家族が過ごす五日間嘗てなかつた穏やかな日々

長澤千恵子

一部屋とは旅館の部屋のことでしょう。ご家族で旅行をされて、穏やかな日々を過ごす様子が伝わってきます。四句目を「嘗てなかつた」としたのは、どんな背景があるのでしょうか。

断捨離の本を思へば悔やみありあの「水点」を読み返したし

今野澄子

以前読んだことのある本をもう一度読み返したいと思うことはよくあることで

## 五月号 作品三評

橘  
美千代

「イエローアイコ」厳選品種手に入れて一粒一粒ポットに埋めお

越澤太朗☆

「イエローアイコ」とは、ミニトマトの一種であるこの歌で知った。赤色と黄色とがあるという。酸味が少なく甘味が強くフルーツのようだとか。下の句より作者が大切な種を注意深く埋める様子が目に浮かぶ。一粒一粒ていねいに。期待と意気込みが伝わってくる。

石垣の碧海見つ数日を風の流れと波音に浸る

長澤千恵子

日常を離れて石垣島を訪れ家族で過ごした五日間を詠んだ一連。碧海という言葉に南国の青く澄んだ海が目の前に広がる。風の流れと波音に浸る陶酔の日々。心身の緊張と疲れが解れてゆく穏やかな時間。筆者もかつて沖繩旅行に家族五人一部屋で過ごしたことを思い出した。

ブーツからスニーカーに変はるとき土

す。「あの」という言葉で表現されている「氷点」は作者にとって特別な書物だったのでしょうか。

遠い日への郷愁を掻き立てる夕陽残る

雪原あかねに染めて

松田忠一☆

雪国で育った人にとってはこういう風景は子供の頃から見慣れているのでしょうか。あかねの染まった雪原の光景を見事に捉えた一首です。

捜したる電話ボックスの一台は受話器の破損一台は不調

河原木光子☆

現代社会が反映されている作品です。

最近では携帯電話が普及して、公衆電話を使う機会はほとんど利用しなくなりました。この歌では、何らかの事情で公衆電話を使う必要に迫られた作者の差し迫った心情が伝わってきます。

若き日の母のコートと青き服解きて縫ひくれし王妃のドレス

児珠純子

子供の頃の回想の歌でしょう。劇に着的るためにお母様のコートと青い服を使用して作った王妃のドレスの見事さが目に浮かびます。こういう思い出は何もの

も代えがたいものです。

満員の電車で席をゆづられて異国の人の優しさしみる

和田妙子

海外旅行での歌と思われる。旅先の不慣れの電車で不安な気持ちがあったこそ思いでしょう。作者の実体験が活かされている作品です。

ガラスのなか伸びる根の白たくましく開くチューリップ花びらは赤

鈴木裕子☆

水耕栽培のチューリップの根の白さに生命力を感じる作品です。植物の根は普通は土の中にあつて目にすることは出来ない部分ですが、水耕栽培により生命の根源の一部があらわになっています。根の白さと花の赤が対照的です。

川沿いの河津桜は五分咲きで眺めて嬉し生きてればこそ

今福崎子☆

河津桜は早咲きの桜ですが、この歌はまだ五分咲きの頃に眺めています。「生きてればこそ」という結句は、作者の今生きていることへの、万感の思いを込めた表現なのでしょう。

の匂ひて足下軽く

今野澄子

雪が解けて春になり、雪道防寒用のブーツを脱いで軽やかなスニーカーに履き替える季節となる。ようやくのぞいた土の匂いを嗅ぐ。雪深い地方であればあるほどその喜びはひとしおなのだ。

大いなる希望を呉れる野や山の大地の鼓動雪解けのころ

松田忠一☆

こちらも雪深い地に暮らす人の春の訪れを欲び詠んだ歌である。下の句の大地の鼓動は決して誇張ではない。長い冬が終わり、雪が溶けやつと現れた田や畑の土は、これから始動しようとするパワーを宿しているかのようだ。

亡き息子幼き姿の夢に顕ち秋の一日を共に過ごせり

河原木光子☆

幼い息子さんを亡くされたという。記憶の中の息子さんはいつまでも幼い姿のまま。作者の夢にある日ふと現れてくれた。切なく嬉しかったことだろう。その息子さんの姿を胸に抱き秋の一日を過ごされたのか。夢が叶えてくれた我が子と時間。秋の日差しのような儚さ。

若き日の母のコートと青き服解きて縫ひくれし王妃のドレス

児珠純子

小学校五年生の時、白雪姫の継母という大役を演じられた。そんな作者のために亡き母君が自分のコートと青い服を解いて王妃のドレスを作って下さったという。時は流れて今しみじみと思いだす作者。母の愛情をありがたさを。

満員の電車で席をゆづられて異国の人の優しさしみる

和田妙子

最近のせちがらい世情では、席を譲られることは殆どないのかも。優先座席に中高生が座っていたりする。そんな日本人と違って異国の人が席を譲ってくれたという。作者も異国の人であったからこそ、その好意を素直に受け入れられたのかも知れない。

庭の梅今を盛りと咲くを見て梅干し作る夢を樂しむ

今福崎子☆

下の句「夢を樂しむ」や他の歌の「思うこと」「蒔きて育てたし」等から望んでも現在できない状況かと推察した。かつてそれができた日々を思い出して。

# 作品二

連れ合い

新井光雄☆東京

仏語詩を必死に訳す我が脇でうんうん唸り妻は「数独」

我れ一応文学部卒連れ合いは経済学部で普通は逆だ

逆なれどここ三十年は「源氏」読むひたすら一筋脇道はせず

文学などおよそ縁なき連れ合いも「光源氏」は別格らしい

我也また「源氏」に付き合いラジオ講座大学講座に講演会へも

秋ごとに明星大に講座あり「藤袴」聴く今年はさて

特技には暗算のありスーパ―が昔はレジで間違い正した

両膝が手術で人工さはあれど今では軽く時に二万歩

欠点は我が好物が牡蠣なるにアレルギーあり食卓に出ず

後藤恭介☆茨城

春浅し畑作業は短時間「芽の出たジャガイモ」植えてみるかな

姫こぶし咲きはじめてたり吾の庭に二十年たち大きくなりて

バラ贈る妻の生日の夕食会いつもの寿司屋で楽しい会話

荒れはてた牛久シャトーの池と滝テレビに映り再生したり

桜吹雪に体操会のシニア達「まずは一杯」と円陣を組む

戦なき国の公園花見酒平和な日本の各地の便り

越澤太朗☆茨城

茅ヶ崎から牛久まで湘南の風連れて来る甥の夫婦は愛車を駆って

篠竹に鯉のぼり舞う野辺の風菜の花畑に紋白蝶たわむれる

恒例となりたる山菜パーティーは老若男女十二名参加となりぬ

手土産は皆で収穫わいわいとほうれん草にきぬさやえんどう

長谷川剛山形

善光寺戒壇めぐりの暗闇でこの世に居ながらあの世を思へり

北斎翁は日課に獅子を描いたとふ禍除き長寿を祈りて

紫木蓮ピンクの花びら縦に咲き風に揺らめく小鳥のごとく

肥やし入れ深く深く土起こし実りを信じてピーマン・茄子植う

炎天下なすびの植栽一区切り飲む一杯の水五臓をめぐる

風薫る初夏の農道散歩するケーンケンとほろろ打つ雉も

泣き相撲パパに抱かれはつけよい臯月の空に泣き声響く

残雪の鳥海山を背に田植逆さ鳥海早苗で埋まる

長澤千恵子山形

夕暮の畦にきこゆる蛙の声田起し前の季節の蠢き

しやぼん玉ふりふりしたら広がりて追ひかけまはる孫の歓声

娘の子のバレエ発表会十年の成果を皆で鑑賞したり

バスに巡る国会議事堂と靖国神社と修学旅行から六十年経て

今 野 澄 子 山形

返事待ち何度もスマホ確かめて友のICUに入りしを知る

枝打ちをしたる木の間より陽の入りて都忘れの緑濃く伸ぶ

暑き日にグツタリ垂れる鯉幟夕風受けて大空泳ぐ

花卉に覆はれ水面揺れ動きお濠の鯉は潜りて泳ぐ

弔辞の「ゆつくりお休みください」にぐづる幼子「はい」と返事す

強風に裏の空き家のトタン屋根畑に落つるを引きずり運ぶ

薫咲くガーデン眺めランチするスパゲッティにはふきのたうの香

児 珠 純 子 山形

八百枚の卒業証書の名前入れたとふ人の達筆な文字

鈴の緒に二歳の男の子の名を書きぬ「鷹平」合はせて二十九画

月一度の白鷹つばき短歌会苦手な「鷹」の字愛しくなりぬ

春之助・弥一ふたりの祖父の名の一字もらひ弟は「一之」

一之とふ名の弟は長男に画多き「晃胤」と命名したり

歌会の隣の席は眞喜子さん亡き母と同じ名前の音は

横須賀で昭和九年に生れし母に眞麒子と名付けし軍人の父

「直」と「真」は目偏の漢字と気付きたり直幸・真望と宛名に書けば

亡き母がわれら夫婦の名を並べ書きし喜びわれも持ちたり

河原木 光 子☆ 広島

日射しうけ牡丹の蕾ふくらみて小さき紅広がりにゆく

虎杖の炒め煮作りて思いだす座して皮剥く姑の姿

この春に山岳会に入会の夫に贈るは靴下と手袋

古稀むかえその朝二人の娘から夫に祝いのメッセージ届く

卓上に『短歌用語辞典』置きひらけばたちまち時間過ぎゆく

メジャーにてわが脹脛測定す三十二センチありて良しとなる

参加する媪の筋力数値聞きフレイル検査に運動意欲わく

和 田 妙 子 山形

数年を咲かず失せしと思ひぬしオダマキの花一株咲けり

亡き父が手塩にかけし牡丹の花一株残り大輪咲かす

母の日は縁なきものと思ひぬし我に妹よりカーネーション届く

年ごとに花を咲かせる白ツツジ優しき伯父を偲びて眺む

久しぶりの飛行機の旅近づきてガイドブックを毎日めくる

鈴 木 裕 子☆ 千葉

退院の叔母を案じて夜半に問う葉は飲めたか水飲んでるか

子猫らを5匹まとめて友の家優しき手にて保護されている

爽やかな風とはいえどやや強くメガネに付いた塵が気になる

母の日の十日は月の命日で黄色の花を父に供える  
車内に乗り込む力士「わあ大きい」という子供の素直さに微笑む  
駅前のパン屋がこんな混んでるとは休日朝の発見

塩野 伸 山形

様々の人との別離思ひをり良くも悪くも今に繋がる  
ふる里はダム湖の底に沈みをりさくらんぼ食みき幼き頃に  
幾年前の非難されし声夢に出づ救はるる道は忘るる事ぞ  
結婚し家を建てむと奮ひ立ちあれやこれやに離婚となりぬ  
露味噌の一膳の碗に思ひ出すほろ苦きあの夏の日のこと

倉田 ひろみ☆ 広島

根菜をたっぷり入れた味噌汁を出張疲れの息子に飲ます  
「ああうまい」二ヶ月ぶりの味噌汁と一口飲みて子は息を吐く  
台湾の「すき家」の味噌汁はイマイチと出張帰りの息子は笑う  
「契約書に日本勤務とあるよね」と批判めきたるわれの口調は  
これ以上子の人生に口出すまい自制しつつも口を滑らす  
母の日には早いけれどと子は言いて寿司食べに行くビールも飲めと  
台湾の職場に戻る日の近し子は常備薬を買い足しており  
三ヶ月の出張の子を見送りぬ台湾海峡穏やかにあれ

鈴木 知 子☆ 埼玉

色とりどりの花はあれども沈丁花の香が一番と言う人のあり  
種を蒔き庭に出でたる山芍薬小さき蕾罅に守られて  
耕した畑きれいに区画する友の頭に菜園図あり  
孫二人泊まりに来たと言う友は夕食なしで寝たいとポツリ  
食べ頃に採りて置きたるタラの芽を天麩羅にして匂を味わう  
玄関先に作られているメジロの巣ドアの開閉そろりそろりと

### 歌会情報・案内・レポート

七月の川越歌会は25日(第四土曜日)午後  
1時～4時半まで。JR線・東上線「川越」西  
口より徒歩5分の「ウエスタ川越」二階会議  
室3号にて開催されます。参加問い合わせ、  
連絡先 ☎安川敏子 (090-4608-7265)  
☎野崎礼子 (090-9971-8149)

五月例会は常時出席の方々のご入院やら体  
調不良やらで欠席が目立ち七名の参加。中  
も特記すべきは、新入会員の鈴木知子さんの  
出席です。今回は発言を控えられたのですが、  
自己紹介の意味を込めて未発表の作品を九首  
持参されたので、それを皆さんと共に鑑賞し  
ました。そのうちの幾つかここであげてみま  
すと、

満開の白侘助に来るメジロ蜜吸う姿小寒  
の朝 鈴木知子

笑いつつ涙が滲む妹は夫と息子の病い支  
えて 同

初めて体験する作歌だというには信じがたい  
歌い方で姿勢もよく好評でした。  
歌会はいつものように参加者すべての作品  
をたっぷり時間をかけて批評し、鑑賞しまし  
た。出席者は、倉浪ゆみ、安川敏子、立石節  
子、山崎猛、野崎礼子、鈴木知子、大山とな  
ります。川越歌会は、司会者倉浪さんの手際  
良い進行で、全員の発言を目指して意義ある  
時間を過ごしております。

\*本欄に冬雷各地での歌会、勉強会のご様子  
をお知らせ下さい。ここに掲載し、情報の  
共有をはかります。(編集室)

### お知らせ

小誌ではどのように運営し、どういう雑誌を  
作ってゆくかということを考え、その改革を  
三年計画で進めています。その一年目の今年  
ですが、秋の「冬雷大会」は誌上大会とする  
ことに決まりました。八月号にそのための出  
詠用紙を載せたいと思います。全員出詠の実  
績を継続したいものと考えています。  
なお、本年も本号より後半に入ります。編  
集委員会の決定により、左の様になりました  
のでお知らせいたします。

作品二欄より作品一欄へ

益坂順子氏、梶尾栄子氏。

お二方は伝統ある雑誌「高嶺」の廃刊によ  
り、平成三十年に入会されたキャリアの長い  
作家です。ますますのご精進を祈念します。

大山敏夫

戦後の時代劇映画にいち早く主役として復帰した一人に黒川弥太郎がいる。その「十六文からす堂・千人悲願（一九五一年 新東宝・萩原章監督）に大友は敵役の「三ツ目御前」役で共演する。殆ど声を発せず宗十郎頭巾姿の顎をしゃくって指しを出す存在感たっぷりの演技で、対峙する。（左画像）



映画「十六文からす堂・千人悲願」宣伝スチール。左、黒川弥太郎。右、大友柳太郎。

この映画、設定では幕府の隠密が「三ツ目御前」で、探られる南部藩を守るために奮闘するのが「からす堂」という関係。最後に剣を交えて敗れた三ツ目御前が再起を宣言して海に飛び込んで去るようになるが、この演技中に大友は、拳銃を片手に馬を疾駆させる姿も見せ後のヒット作「怪傑黒頭巾」を彷彿させた。不思議なことに、この映画のDVD化されたケースの表紙には、あたかも主役が大友であるかの扱いで、黒川の姿がどこにもないのだ。こんなことがあるのだろうか。黒川ファンから抗議もあろう。

戦後映画界でしばらく脇役に回った大友が主役復帰を遂げたのは、一九五三年の「加賀騒動」（東映。佐伯清監督）からである。ここで大友は下級武士から上座家老へ上り詰め、悲劇的最後を遂げる大槻伝蔵の人間性を重厚に演じきった。小松市在任の歌人永井正子氏からの葉書によると、この大槻伝蔵は地元では忠臣として愛され、永井氏も数回その流刑

地の五箇山を訪れたとあった。

この作品を境として大友の「柳太郎」時代が開ける。後援会「碧空会」発足はこのタイミングであり、その後援会が最初に手掛けたのが歌集『渚』のリメイク版歌集『柳』だったということになる。

その新発足の後援会パンフレットでの挨拶は極めて個性的な一文で、わたしは「歌集『渚』鑑賞」の中でも触れた。冒頭から「愚鈍」を三度も繰り返して、叱咤激励の「鞭撻」を幾度も乞う謙虚さであった。大友は「愚鈍だけれど努力をしてきた」と言っているが、後援会会長となつた村上元三の挨拶文もあるので、それも資料として興味深いし、画像としてここに紹介したい。合わせて、映画界にデビューを飾つた大友の挨拶文も画像として次に紹介する。

上が昭和十二年の浅草電気館のパンフレットに載つた挨拶文であり、左が戦後の後援会会長の村上元三による挨拶文。「加賀騒動」で主役カムバックを果たす前は、脇役敵役が続いていた。前述の

## 懐しの東京の皆様へ

大友柳太郎

皆様には益々御機嫌お慶しき事と存じます。私事永年新國劇座員として皆様の御懇切なる御指導を賜り厚く御禮申し上げます。而此度辰巳柳太郎先生の御肝入りで新國劇を圓滿退座新興キネマ京都撮影所へ入社、映畫界へスタートを切る事になりました。同時に今迄の中富大輔を癡し、先生のお名前までも頂戴し『大友柳太郎』を名乗らせて頂くことになりました。勿論私としては映畫出演は初めての事ではあるし、から未知の世界に對する希望と抱負は持つてゐますもの、聊か馴れない勝手違ひの淋しさはありますが、全身全霊を抛つての奮闘努力は必ずや皆様の御期待に副ひ得るものと固く信じてゐます。又それを此處にお誓ひ申し上げます。

既に入社第一回作品『青空浪士』も押本七之輔先生はじめ諸先輩の御指導によりこゝに完成し、目下日夜兼行で第二回作品『佐賀怪猫傳』に全力を傾注致してをります。皆様どうぞ新しく呱呱の聲をあげた大友柳太郎の、新しき此の門出を祝福してやつて下さい。そしてどうぞ皆様の力強い御後援と御指導御鞭を一重に懇願申し上げます。

「十六文からす堂・千人悲願」は黒川弥太郎の敵役だが、その前にも同じスタッフによる作品「神変美女峠」にも出演し、「青鬼」という殺人鬼の役で黒川と対決し異色を放っている。

以前にも出演し、その時は、阪東妻三郎演ずる左膳の敵役の「峰丹波」としてであり、あっさり斬られて死ぬ。愚かなる毀誉褒貶にまかれじと大地に足を踏みしめて立つ  
（歌集『渚』 昭和十四年）  
おほかたの物憂きことは忘れたる顔して生きんしばしでもよし  
（同）  
与えられた仕事を誠意を込めて力いっぱい頑張る。そうすれば結果は付いてくる。そんな生き様が見える作品だ。

## 大友柳太郎後援會のために

村上元三

作者と俳優は、つねに密接なむすびつきにあるが、最良役者をえらぶとなると、案外これで點が幸いのではないかと思ふ。そんなばくが、大友柳太郎に對してはベタ惚れに惚れている、といつていゝくらいの打込み方をしてゐるのは、彼がつねに誠實の人だからである。こんど大友柳太郎君の後援會が出来ると聞いて、僕は心から嬉しいと思つている。

## ■岩下静香歌集

## 『チャイムのもとに』

令和七年十二月二十六日、四九〇首の第二歌集。教職、子育てが柱の歌作からは元気な生活者の姿が現れてきた。「短歌人」同人。家族に関すること。

フロリーングの冷たさに伏していたりしがそのまま馬となりて子に乗す  
ティッシュ引くうすき力を得たる子がリ  
ピングをしろき波に満たせり  
夫と子ら正方形の炬燵からてんでに生えて眠る午後なり  
平日の夜の室温上がりたり单身赴任の夫が戻りて  
押入れの「地球鉱物コレクション」このあと地球のいずこに行かん  
思い出の手編みセーターその手にて毛糸に戻す母の終活  
教室で。

黒板に「リストラ」の文字添えながら平成生まれに説く『羅生門』

大腿に我を抜き去る横顔は教室よりも大

ぞれの思いをもった。

この青き星に国境なきことを一夜に拡がるウイルスに知る  
顔、こころ大きマスクに覆われて私がかんどん消えてなくなる

「十月」は著者には特別の月。

父と母、いもうと逝きし十月のまた巡りきてコスモスの咲く  
悲しみはやがて淋しさ季節を経て今は恋しきコスモス咲けば  
妹逝きしあの日も空は青かった神の在さぬ十月の朝  
花や景色の歌。

住む人の少なき村の家々に赤々燃えてカ  
ンナが咲けり  
怨念の炎吐くごとアマリス背中合わせにどかんと開く  
太郎右衛門、釘無、初雁、橋三つ渡り帰らな亡母待つ里へ

自分はどうだろうと思わせられる。  
突然に長い髪の毛切りし娘がそっと告げたりへアドネーシオンと

雛守るカラスが頭上をかすめ飛ぶ かかる必死さがわれにありしか  
家業のことなど。  
娘はSサイズ、夫はLの白衣二枚並べ干

人びて見ゆ マラソン大会  
著者の動作など。  
10kmは長く短く頭の中に伸び縮みする  
ただ走るべし

よこすかシーサイドマラソン  
はつ夏の辞林を割って紙擦れの音したたらせ一語にいたる  
眠業のひそむ月光浴びたれば一身さらに無言となりぬ  
題名の一首。

教室はがらんだうなり幻の音がチャイム  
のあとに聞こえる  
(六花書林刊)

## ■君山宇多子歌集

## 『涵養の地』

令和七年十二月十五日発行の第四歌集で  
三七七首を収める。古語を愛用していること  
が印象的であった。  
古語いろいろ。

しみらなるくぬぎ林に暑気こもり木の噴  
き出だす蜜が匂へり  
藻に潜む魚をすなごる白鷺の細き脚透く  
冬の川みづ  
杉の枝のしみみなる蒼うるませる新年の  
雪の滴したたる

したり夏のおおぞら

とことんまで仕事に向き合う日々なりき  
夫は歯医者者の五十年を終う  
音のなき診療室に白き音刻む秒針小さく響く  
プーチン侵略に関する多くの歌から。

アメリカが生みて育てし民主主義隣時に  
壊すか ドナルド・トランプ  
(かりん叢書第460篇 公益財団法人 角川文化振興財団刊)

## ■加藤 都歌集

## 『山車と花火』

令和八年一月三十日発行の第一歌集。短歌  
を始めて二十年余を八十歳にして振り返る  
四六三首である。市長夫人としての顔、傾聴  
ボランティア活動、趣味の茶や華道他を活か  
す力を以て、歌作は若わかしきに満ちている。  
出身地、奈良の御所市、ここでは奈良県代  
表としてインターハイに出席した高校時代の  
思い出が愛着深き地である。

両親のなき故郷に帰りたる夕陽のなかの  
われはどこの子  
記憶にある稜線をただ思ふのみに帰れた  
くなる故郷なるは  
いま住むは愛知の清須市、市長の再選を重

その他、けやけし、たづきなし等等。  
「歌は生活から」という教えを大切にしてい  
るといふ歌作、その場面の様様。  
わがためにこころ育てる時間ならむ火を  
細め炊く粥透きとほる

電気ショックに応へぬ祖父を見守れる女  
医はひとりの孫とはなりて  
忍び手の音無きおとを聴きにけり 御前  
の飯の湯気のゆらめき  
金婚を祝はれてゐる京の旅絆創膏などか  
かどに貼りて  
細胞にささやきかくる旋律に戦げるわれ  
も一草ならむ  
薄明のなか咲き出だす朝顔に具はるとい  
ふ体内時計  
施設にてながらふ姑の手すさびの風鈴の  
音は暮らしの断片  
(濤声叢書第37篇 いらの舎)

## ■多田政江歌集

## 『郭公の空』

姓の「多田」はおおたと読む。令和八年一  
月二十三日発行の第二歌集で、三九五首を収  
めている。

この歌集はコロナの始まり頃からの作品で  
コロナといえはマスクだった。人びとがそれ  
めていて。  
美濃路にも夏がきたりとこの年も五台の  
山車と花火が告げる  
立候補はこれが最後と願ひつつ夫を見送  
る告示の朝  
公約をすべて果たせる目処がつき荷を下  
ろしたるやうな夫の背  
ボランティア。  
アフリカの孤児の自立を支援するミンシ  
ン集めに奔走をする  
着古しの服を待ちある児等の住む湖の向  
かうにビル立ち並ぶ  
災害地などへの傾聴ボランティアやハンセ  
ン病施設訪問。  
再会をせぬ人ゆゑに本心を吐露するとい  
ふ心理にふれる  
同胞と断絶されたる人生のさけびの声に  
鏡さんおもふ  
荒みゆく園にとどまりる人を風化させ  
ぬと語り部になる  
元気な歌と笑える歌と。  
いつからを余生と言ふのか次つぎと夢は  
生まれる何度消えても  
シヨルダーバッグをいかに持ちしか撫で  
肩にローランサンを描きし女は  
(朔日叢書第125篇 本阿弥書店刊)

ご批評、ご紹介 御礼

（交流他雜誌最近号より）

■林間 二〇二五年十月号

「受贈歌誌を読む」脇中範生氏担当

ゆつくりと歩めばいつもの散歩道スマホにきざむ歩数の増しぬ 森藤ふみ  
うぐひすの上達したる歌を聞くこの恋きつと きつと成就す 村上美江

「冬雷」七月号より

■花實 令和七年十一月号

「歌誌光芒」樫本信子氏担当

石くれの河原を裸足に走りたる子供の頃の皮膚は今無く 嶋田正之  
譲られて座るバス席女生徒の若き温みの残る窓際 田端五百子  
ハウス内は風は生まれず一生を風を知らずに育つ椰子の木 井上菅子

「冬雷」八月号より

■香蘭 令和七年十二月号

「他誌拜見」小笹岐美子氏担当

ひさびさの少年寡黙の類緩めケーキ三個をすみやかに食べる 田中裕子

歌壇座標

握り飯ただに美しく結びたる若き日の妻とほき思ひ出 大山 敏夫  
コンビニも無く働きし夜勤の日々妻の握り飯広げて食ひき

【庭瀬理枝子】「冬雷」三月号の「冬雷集」から二首を取り上げた。作品八首中六首が「握り飯」の歌。一首目、若い日の妻

が夫である作者に美しい握り飯を結んでくれた。思い出は遠くなつてしまつたが今でも作者の心に忘れられない記憶として残っている。「ただに美しく結びたる」の表現に若い夫婦の初々しきを感じる。作者の他の歌を読むと握り飯の形は三角形だったようである。「美しく」の言葉は握り飯の形だけではなく、米を結ぶ妻の手の美しさをも読み手に連想させる。

二首目、夜勤で働く作者が妻の結んでくれた握り飯を広げて食べている。仕事の合間のほつとするひと時の様子が目に浮かんでくる。コンビニが出来たのは一九七〇年頃からである。便利な世の中になつた。しかし、コンビニのお握りでは、作者のよう

うぐひすの上達したる歌を聞くこの恋きつと きつと成就す 村上美江  
関西のゆるキャラたちは不思議系笑いのツボがすこし異なる 吉田佐好子

「冬雷」七月号より

■潮音 二〇二六年五月号

「寄贈誌紹介」菊川佐智子氏担当

すでに我らにしたがふ子らの無きことを思ひ出でて熊の母子をおもふ 大山敏夫  
エレベーター「開」のボタンを押し続け少年は我を待ちあてくれる 赤間洋子

逆さまにすれば出でくる蜂蜜のパンに沁み入る穏やかな朝 小林芳枝

「冬雷」二月号より

■花實 令和八年五月号

「歌誌光芒」青木美智子氏担当

「庭の千草」上手にうたふ母なりき露草の藍見つづいびぬ 奥山清子  
断捨離の中の小皿のいとほしく見返ししてはまた手に戻す 今野澄子  
月巡る務め終えたる月面にかくや眠りて砂塵となりぬ 手賀稔子

「冬雷」一月号より

短歌総合紙・月刊 年間定期購読6000円(税・送料込)

うた新聞

おかげさまで創刊14周年!

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集、全国各地を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。

●お申込みは、いりの舎まで

〒一五五〇〇三三 東京都世田谷区代沢五―三―一五 シェルボ下北沢四〇三  
電話 〇三―六四―三―八四二六 ファックス 〇三―六四―三―八五二六  
メール chunon@inosha.com

な情感溢れる作品は生まれてこない。

【倉持則子】一首目、作者の新婚時代の思い出か。奥様のお握りは、きつちり美しく結ばれている。そのお握りの姿に感動する作者の眼には、奥様の美しい姿も重なって映っている。「ただに美しく」という表現に、お握りも奥様も純粹に美しいと感じ、幸せをかみしめている作者が見えるようだ。

二首目、そのお握りを夜勤の休憩時に広げる。美しいお握りを誇らしく思つて広げる。夜の静寂の中で、そのお握りは輝いて見えたことだろう。奥様の「頑張つてね」「安全に」という気持ちも込められているのだ。ほつとするひとときだったに違いない。コンビニのない時代ゆえの情感。前評者に賛同する。

春間近

大山敏夫

風吹けば土巻き上がる季節来て春近からむと外へ出で行く

暖かき日差しながらも風冷えて畑地の赤き土ふきつける

道路端に風の残せる砂土がふかぶか溜まりまた巻き上がる

土けむりとなりて視界の赤濁り広き畑に挟まるる道

赤き土風に飛び降る空濁り太陽光の鈍く照りをり

老身のわが眼のうへを土が飛び視野曇れども嘆きなどなし

見上げれば火の粉の降つてくるやうな二月の空あり老いたる目には

●「短歌研究」令和8年5・6月号より転載



斎藤茂吉 大君をむかへまつらく蔵王のやま鳥海のやま月跡の山

左から 茂吉、初孫 茂一、嫁 美智子、妻 輝子

斎藤美智子「茂一図」

斎藤茂吉記念館 特別展

# 新収蔵資料展

2026 4/25(土) → 8/31(月)

会場 斎藤茂吉記念館内守谷夫妻記念室(地階)

開館時間 9:00～17:00(入館受付16:45)

休館日 毎週水曜日、7月第2週(7月5日から同11日)

※水曜日が祝日等の場合は開館し、翌日休館

入館料 大人 600円 / 学生 300円 / 小人 100円

※団体10名様以上割引 ※障がい者等割引(団体料金)

イベント情報

館長講座 / 「ドナウの短歌と私のドナウエッシンゲン訪問 ～茂吉弁当とともに～」

日時 / 令和8年6月28日(日) 13:00～14:00(受付/12:00)

参加 / 定員30名・要申込(入館料)

※希望者は別途弁当代1,200円(税込/キャンセル料有)

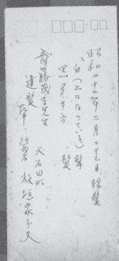
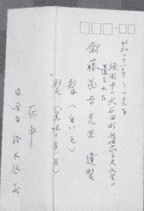
夏のワークショップ / 「茂吉記念館スケッチ会」

日時 / 令和8年8月2日(日) 13:30～14:30(開場/13:00)

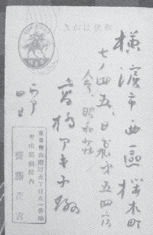
参加 / 定員10名・要申込(入館料)

特別展チラシ持参の小・中・高校生は入館料が無料となります。

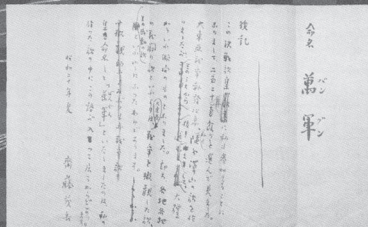
斎藤茂吉遺筆・封筒



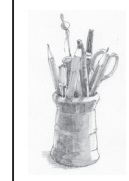
斎藤茂吉書簡高橋アキ子宛  
昭和20年1月6日消印



歌集「萬軍」



編集  
後記



▽今月の高橋輝次氏のコラムの中でタイトルを決定してから小説の筆を進ませる作家の話は興味深かった。

例えば私達が歌集を作るとしたらタイトルは後で付けることが多い。そういう固定観念を打ち払ってくれたことが有り難く、頭の中を一陣の涼風が吹き抜けた感じがした。

▽大山編集長の「大友柳太郎歌集『渚』鑑賞」補記には今月も貴重な資料が示されている。映画の仕事に対する大友の誠実さは、その短歌作品の繊細な感覚に繋がっているように思った。編集長がこんなにも熱心に論考を積み重ねて来られたので読者の私としても大友が出ていた映画を少し見ようと思っている。

▽本年の大会は誌上大会開催となるようだ。詠草提出には全員参加して盛り上げていきたい。

(桜井美保子)

▽今月は昭和十九年生まれの会から井口世津子氏の五首を頂戴した。お亡くなりになった御主人様を思い、散歩の道に様々な花や蝶とめぐり合う日々がうたわれている。

▽本年一月末に亡くなった富田眞紀恵氏を追悼して幾つかの文が集まった。享年91歳というが、特にここ数年は特殊な環境の中で懸命に生きる様が歌われていた。小誌基盤を作った功労者の一人であった。合掌。

▽小誌の今後を考える三年計画の一年目である。先月号より雑誌の発送業務を改革し、印刷所に袋詰め作業等の手伝いを依頼している。こうした事も含めて全て経費が新たに発生しているの、来年からはその費用をどう動かしてゆくか、具体的な方法を実行せねばならない。つまりは会員の皆様へのご負担をどういう形でお願ひするか、残す二年間で対策を打ち出してゆく。

▽本年は大会をホテル等で行うことを断念し、(誌上大会)とする方向を進めている。

(大山敏夫)

▽今月の応接室に来て下さった井口世津子さんは私と同年、昭和十九年生まれの会でご一緒させて頂いた。現在は「雲珠」短歌会で活躍されている。暫くお会いしていないが少し細めになられたような写真と作品を拝見して懐かしくなった。

▽今月の高橋輝次氏のコラム「タイトルを付けるのは難しい！」には作品に付けられたタイトルの重要性が詳しく書かれている。私の知っているタイトルも幾つかあったので興味深く傾きながら拝見した。短歌作品のタイトルなども連作を象徴しているような感じがある、改めてタイトルのもつ効果の大きさを知ることができて読む楽しみが増えた。

▽富田さんの追悼文を書きながら又ひとり友が居なくなつたことを実感した。寂しいけれど最後まで歌を詠み続けたことは素晴らしい。

▽御寄附御礼

三浦武様

吉田綾子 匿名一

(小林芳枝)

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
  - 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
  - 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
  - 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
  - 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
  - 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
  - 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
  - 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
  - 一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
- \*会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
  - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
  - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
  - D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
  - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。
  - 一、担当選者は原則として左記。
    - 冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
      - ・担当 大山 敏夫
      - ・担当 桜井美保子
    - 作品一欄
      - ・担当 小林 芳枝
    - 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
      - ・担当 小林 芳枝
  - 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
  - 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一まずつべタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山敏夫 tourai-ooiyama@nifty.com
  - 小林芳枝 kysie@nifty.com
  - 桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026年7月1日発行

編集発行人 大山 敏夫  
 データ制作 冬雷編集室  
 印刷・製本 (株) ローヤル企画  
 発行所 冬雷短歌会  
 350-1142 川越市藤間 540-2-207  
 電話 090-2565-2263  
 事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409  
 振替 00140-8-92027  
 ホームページ <http://www.tourai.jp>



小誌QRコードです。ここから入れます。

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向				
冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
33	32	28	13	106
(-1)	(+3)	(-2)	(-1)	(-1)
*上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。				